

人文会ニュース

jinbunkai news

April 2023

NO. 143

1
15分で読む

生誕300年目のアダム・スミス

野原慎司

15
書店現場から

今日も今日とて消費されない本を売る

小谷輝之

22
図書館レポート

図書館、出版業界を取り巻く情勢と提案

菊池壮一

34
編集者が語るこの叢書・このシリーズ²⁶

シリーズ「あいだで考える」創刊に寄せて

内貴麻美

2022年秋季グループ訪問報告



www.jinbunkai.com

(第12回
東京大学南原繁記念出版賞受賞作)

菊間晴子

犠牲の森で

大江健三郎の死生観



大江健三郎という作家の全体を、「犠牲」のテーマから一貫して解釈しえた画期的研究。

5,280円(税込)

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<https://www.utp.or.jp/>

創元社

◆2023年4月刊行開始◆

シリーズ「あいだで考える」

自分疲れ

——コロナとカラダのあいだ

難病の実体験に基づいた文学紹介活動を展開する著者が、多彩なジャンルの作品を取り上げ、心と体の関係性について考察していく。

頭木弘樹 [著]

四六判変型・並製
160頁・1,540円

SNSの哲学

——リアルとオンラインのあいだ

SNSの利用を巡る様々な現象を哲学の視点から捉え直し、物事を哲学によって考えることの面白さと大切さを実践的に示す。

戸谷洋志 [著]

四六判変型・並製
144頁・1,540円

◎正解のない問いを考え、多様な他者と生きる◎

大阪市中央区淡路町4-3-6 (税込)

TEL06-6231-9010 Fax06-6233-3111

千代田区神田神保町1-2 TEL03-6811-0662

公教育で 社会をつくる

ほんとうの対話、ほんとうの自由

リヒテルズ直子・苦野一徳 [著]

対話力のある市民、民主社会を育む学校文化を力強く提言！ ■1870円(税込)

戦争と 文化的トラウマ

日本における第二次世界大戦の
長期的影響

竹島 正・森 茂起・中村江里 [編]

日本の戦争体験をトラウマの視点から学際的に考える。 ■3520円(税込)

日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL: 03-3987-8621 <https://nippyo.co.jp>

猪木武徳

地霊を訪ねる

もうひとつの日本近代史

日本を「知る」、その悦びに満ちた傑作紀行

日本近代史の舞台を旅し、その土地にしみ込んだ、今は亡き人々が発する無音の声に耳を傾ける歴史エッセイ。PR誌「ちくま」連載、待望の書籍化。 定価2640円

筑摩書房

営業部 03-5687-2680

*定価は10%税込です。

<https://www.chikumashobo.co.jp/>

— 15 分で読む —

生誕300年目のアダム・スミス

アダム・スミス（1723—1790年）は時代を映し出す鏡である。時代とともにスミスの読み方も変わってきたが、生誕300年目を迎える今日もなお変化しつづけている。それはいかなる古典にも当てはまる運命であるが、スミスの場合、市場や資本主義という現在経済の捉え方の源流ともみなされている以上、スミスをどう捉えるかは現代経済をどう捉えるかの問題に直結するので、スミス解釈にはとりわけ生々しい問題が潜んでいる。すなわち、スミス思想の解釈は、スミスをどのような政治・経済思想的含意を持つ人として解釈するかという問題と表裏一体なのである。

野原 慎司（東京大学大学院経済学研究科准教授）

スミスの生涯

その問題を取り上げる前に、簡単にスミスの生涯を振り返っておきたい。

スミスはスコットランドに生まれた人である。スコットランドは1707年にイングランドと合邦し独立を失った。イングランドおよびその植民地という巨大市場と結合されたことにより、スコットランドは合邦以後急速に経済発展した。とりわけスコットランドの南側（ローランド）で経済発展する一方で、北側（ハイランド）は未だに遊牧生活の人が多くおり、経済的に立ち遅れていた。このような経済発展程度の差の認識が、スミスの経済学の背景ともなる。

いずれにせよ、スミスがグラマー・スクールと呼ばれ

る英国の中等教育機関に在籍していたときには、セネカをはじめとしてストア派の著作に親しんだといわれている。スミスは、単なる経済重視の人ではなく個人の徳という生き方の問題を重んじたことが今日では知られているが、それは、この時期に培ったのである。

さらに、グラスゴー大学に入ると、当時の第一級の哲学者であったフランシス・ハチスン（1694-1746年）の薫陶を受ける。ハチスンは道徳哲学を教えており、スミスのそれにも大きな影響を与えた。その後、オックスフォード大学留学から帰国後、グラスゴー大学の教授となる。その間、1759年には『道徳感情論 *The Theory of Moral Sentiments*』を出版している。その後、グラスゴー大学教授を辞任し、貴族の家庭教師としてヨーロッパを周遊し、とりわけフランスでは重農主義者をはじめ当時の知識人と交友を持った。

その上で、スミスは『国富論』（1776年）を刊行する。この著作でもって、スミスは経済学を創出した人として知られることになる。

そして、関税委員を務めた後、1790年にスミスは亡くなる。スミスは『哲学論文集』として友人に出版

を託した原稿以外は、原稿を焼却するよう友人に依頼し、実際に原稿類は焼却されたものだといわれている。このことが、スミス研究を著しく難しくしている。

スミス研究の発展

生涯としてはどちらかといえば単調にも思え、平穏な暮らしを楽しんでいたようにも見えるスミスはしかし、没後論争の種となる。スミスをめぐる論争はまた、それぞれの時代も反映していた。

例えば、スミスの没後19世紀にかけて、英国を中心とした自由貿易体制が敷かれた段階においては、スミスはそのイデオログとみなされていた。むしろ、自由貿易にすると自国の幼稚な産業が壊滅することを危惧する19世紀ドイツのフリードリヒ・リスト（1789-1846年）のような経済学者は、スミス流自由貿易には批判的であった。ただいづれにせよ、スミスは「自由放任」政策の人とみなされる傾向にあり、それは自由な経済活動を重んじ政府の介入に批判的な当時の風潮を反映していた。その後、20世紀に入るにつれて、マルクス主義の勃興とともに、スミスはマルクスの先駆者として論じら

れることも少なくなかった。それもまた、当時の時代を映し出していた。例えば、ロンド・L・ミーク（1917-78年）は、マルクス研究者でもあるが、スミスの研究者でもあり、マルクスの資本主義観の起源をスミスに求める研究を行った。

我が国におけるスミス研究

スミス研究が時代を映すというのは我が国のスミス研究にも当てはまる。

スミスが一般的に経済学者として知られてきたのは、『諸国民の富の原因の本質と原因の探究 *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*』を1776年に刊行したことによる。この著作は、『国富論』と我が国では略記されることが多く、翻訳においても題名がそう表記されている（ただし、『諸国民の富』と表記される場合もある）。この『国富論』という題名は、もとをたどれば、明治の翻訳に由来する。田口卯吉（1855-1905年）が1882年に『国富論』の翻訳を決意し、尺振八（1839-1886年）のバックアップのもと、石川暎作（1858-1886年）が『富国論』として

翻訳を手掛けるも、その後石川が亡くなり、嵯峨正作（1853-1890年）が翻訳を引き継ぎ、1888年に完成させた。田口は自由主義者であったが、『富国論』という題名も、その後採用される『国富論』という題名も、富国強兵という言葉を連想させるに十分なものであった。スミスは、人々、それもさまざまな国の諸国民の富の解明を自らの著作の目標としたのであるが、それにもかかわらずこの著作がそのような題名で訳されたのは、明治という時代を反映しているともいえる。

これは皮肉である。というのも、『国富論』の刊行より百年以上前、トマス・マン（1571-1641年）の『外国貿易によるイングランドの財宝 *England's Treasure by Foreign Trade*』（1664年…ただし原稿はおそらく1620年代に書かれた）がまさしく「イングランド」の国益を追求したが、その立場をスミスは批判したからである。マンは重商主義者として知られているが、スミスは重商主義者を批判したことで知られている。スミスの重商主義批判には不当な点が多いことが今日では知られているが（本当は、スミスは重商主義の著作から大きな影響を受けていたし、スミスは重商主義を短絡的に解釈し、その多様性を

捉え損なっている)、スミスが重商主義のどこを批判したかは、『諸国民の富』という題名によくあらわれているのである。スミスは、英国の富を他を押しつけてでも追求したのではなく、そうしようとした重商主義を批判したのである。

しかし、その後、我が国では、スミス解釈が進展したが、戦前においてはとりわけ、スミスはコスモポリタンとして解釈されることもあった。そこまでいかなくとも、国家の経済における役割を軽視したものとしてスミスを批判し、国家の役割を重視する経済学を目指すべきとする主張が戦前・戦時期には例えば大河内一男(1905-1984年)によりなされた。これに對して、高島善哉(1904-1990年)はスミスをそのような立場から解釈することから距離を置いた。いずれにせよ、戦時経済への協力が求められ、自由経済よりも国家統制の経済が目指されがちであった時勢を反映している。

戦後においても、例えば小林昇(1916-2010年)は、スミスを、19世紀ドイツのリストや重商主義と対比させることで、スミスのいう自由貿易体制は、どの時代でも通用するものではないことを暗に示唆しようとした。

これは、政府の経済的介入のもと、幼稚産業の保護・育成が図られた戦後高度経済成長期という時代背景を反映している(この間の経緯については、拙著『戦後経済学史の群像——日本の資本主義はいかに捉えられたか』(2020年)で取り上げた)。

現代のスミス研究

しかし、ポスト戦後の時代において内外のスミス研究はさらに変化する。

1970年代以降にグラスゴー版アダム・スミス著作集がオックスフォード大学出版局より刊行され始めると、スミス研究は飛躍的に進化した。19世紀ドイツでは、『道徳感情論』では人間本性は利他的に描かれ、『国富論』では人間は利己的とされるので矛盾があるとされた。これは一般的に「アダム・スミス問題」と呼ばれる。しかし、両著作の間に矛盾はないということは、グラスゴー全集の出版、とりわけ編者による序文によって示されたのである。すなわち、『道徳感情論』の中心概念である同感(sympathy)は、利他心を説いたのではなく、それ自体としては道徳的に中立である道徳的判断能力であ

り、したがって、同感によって、スミスは利己心も利他心も一定の範囲内で認めているのである。

さらに、それまでには十分に用いられなかった資料の影響が大きい。スミスの『法学講義 *Lectures on Jurisprudence*』(1762-63(Aノート)、63-64年(Bノート))は、スミスのグラスゴー大学道徳哲学教授時代の学生による講義ノートであるが、スミス研究の一つの新基軸となった。例えば、ドナルド・ウィンチ(1935-2017年)の『アダム・スミスの政治学——歴史方法論的改訂の試み *Adam Smith's Politics: an essay in historiographic revision*』(1978年・邦訳は1989年)は、経済学者として知られてきたスミスに対して、スミスにとっては政治学もまた重要であることが示された。この方向性をさらに進めたのが、クヌート・ホーコンセン(1947-)による『立法者の科学——デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスの自然法学 *The Science of a Legislator: the natural jurisprudence of David Hume and Adam Smith*』(1981年・邦訳は2001年)である。本書において、スミスの『法学講義』が存分に用いられ、その結果明らかになったのは、スミスにおいては、経済は自由放任政策

で良いのではなく、政治の役割もスミスは十分に認識していたこと、さらにそもそも、スミスの経済学それ自体が立法者に政策的指針を与える「立法者の科学」として意図されていたことが明らかにされた。このような研究は近年さらに進み、スミス研究者のほとんどはもはやスミスを「自由放任の人」とは見えていない。

その結果として、欧米ではスミスの政治哲学・倫理・道徳的分析が近年では急速に進展した。それはまた、特に1980年以降欧米でいわゆる新自由主義が進展し、市場メカニズム重視の考えや政策が普及し、その際スミスがその源流とみなされることへの反発もあった。スミスは、市場メカニズムを硬直的に信じて、現実へのその適合性を考えない原理主義者であったのではなく、現実との適合性や政治の重要性を捉えていたことが明らかにされた。さらにそもそも、スミスの経済学の背景には、道徳哲学があることも十分に強調されるようになってきた。

この点には、スミスの思想の知的背景の研究の進展もある。18世紀の啓蒙主義運動は、フランスやドイツのみではなく、スコットランドもまた拠点であったこ

とが明らかにされてきたのである。その結果として、1970年代以降内外でスコットランド啓蒙研究が進み、1980年代以降定着する。海外でもそれは論じられたし、我が国でも研究された。その背景には、例えば水田洋(1919-2023年)がスコットランド歴史学派研究として1960年代から研究をしてきたことがある。とりわけ、イシユトファン・ホント(1947-2013年)とマイケル・イグナティエフ(1947-)編による論集『富と徳——スコットランド啓蒙における経済学の形成 *Wealth and Virtue: the shaping of political economy in the Scottish Enlightenment*』は、スミスを含む経済学がスコットランド啓蒙という文脈で発展したことを明らかにした名著であった。

こうした研究動向に基づき、我が国でもスコットランド啓蒙研究が進展する。篠原久(1944-)の『アダム・スミスと常識哲学——スコットランド啓蒙思想の研究』(1986年)はスコットランド啓蒙を常識哲学の文脈から位置付けたし、田中正司(1924-2020年)の『アダム・スミスの自然法学——スコットランド啓蒙と経済学の生誕』(1988年・増補第三版、二〇一九年)をは

じめとする一連の著作では、スミス思想の知的背景にある自然法学・神学・道徳思想などが調べられた。田中秀夫(1949-)の『スコットランド啓蒙思想史研究——文明社会と国制』(1991年)をはじめとする一連の著作では、スミスをとりわけスコットランドの知的文脈で位置付けようとなされた。新村聡(1953-)の『経済学の成立——アダム・スミスと近代自然法学』(1994年)は、スミスの自然法学の発展を捉え、その文脈でスミスの経済学を位置付けた。只腰親和(1950-)の『天文学史』とアダム・スミスの道徳哲学』(1995年)は、スミスの「天文学史」におけるニュートン主義がスミス思想の方法に与えた影響を取り扱い、竹本洋(1944-)の『『国富論』を読む——ヴィジョンと現実』(2005年)は『国富論』の鋭意な読みを示した。これらに収まりきらない膨大な研究がなされてきたのである。これらは、スコットランド啓蒙研究やスミス研究の進展を背景としてなされている。

その際、例えば、彼ら以前のミークのようなスミス研究者が、マルクスとの関係でスミスを描き出そうとしたのに比べると、彼らは程度の差こそあれ、少なくとも表

面的には一定のイデオロギーや立場から距離を置こうとしている。それは、イデオロギーとの関係で思想を描くことを、クエンティン・スキナー（1940）らが批判し、過去の思想はその思想家が何を意図したのかの読み解きに基づかねばならないとする文脈主義を提唱し、思想史の方法論として定着したことも背景にあるだろう。

ただ、我が国におけるスミス研究の特色としては、総じて、経済学部にも所属する経済学者がスミス研究を主として担ってきた点に、海外とは異なる特色がある。したがって、我が国では、スミス研究者は、経済学の勃興・形成に関心を持ち、その点からスミスを問題にする傾向にある。

さらに、近年では、若手中堅のスミス研究者が激減してしまっており、我が国のスミス研究の継続が危うくなっているのが実情である。むしろ、筆者は『アダム・スミスの近代性の根源——市場はなぜ見出されたのか』（2013年）において、スミスを研究したが、その際、市場を、経済学としてよりも政治思想の問題として論じた。18世紀には政治思想から経済学は独立していない以上、そのような考察により、スミスの市場論の持つ含意

がより浮き彫りにできるからである。

これに對して、海外では、欧米の経済学部からは戦後のある時期以降経済学史や歴史研究（計量系以外の経済史等）が実質上放逐されてしまっており、スミス研究を行う経済学者もいるものの、スミス研究者の多くは歴史学や政治思想や政治哲学や倫理・道徳などの専門家である。こうした結果として、海外ではとりわけ『道徳感情論』の精密な分析が驚くほど進展した。それらの研究は我が国では残念ながらあまり紹介・翻訳されていないものの、彼我の差には歴然たるものがある。そのような研究として、例えば、チャールズ・L・グリズウールド（1951）による『アダム・スミスと啓蒙の徳 *Adam Smith and the Virtus of Enlightenment*』（1999年）や、ライアン・パトリック・ハンリー（1974）による『アダム・スミスと徳の性格 *Adam Smith and the Character of Virtue*』（2009年）がある。これらの研究が翻訳されるだけでも、我が国のスミスのイメージは相当変わるであろうが、残念ながら十分に吸収されているとはいえない。とりわけ、スミスの道徳哲学を、単に経済学の背景にあるからという理由で焦点を当ててのではなく、固有の魅

力を持つものとして丹念に分析していることがこれらの著作の特徴である。むしろ、経済の背後にある道徳の分析も行っており、むしろ、経済に焦点を絞るすぎないでスミスの道徳思想を明らかにすることにより、かえってスミスの経済学の背後にある道徳がより浮き彫りになったという良いであろう。

ただ、我が国でも、堂目卓生(1999)の『アダム・スミス——『道徳感情論』と『国富論』の世界』(2008年)の人氣が継続していることから示されるように、経済の背後にある道徳への注目は深まっている。いずれにせよ、内外で経済の背後にある道徳に注目が集まっているのは、個人にせよ企業にせよ現代の社会があまりにも利益追求重視で動いてしまっていることへの食傷があるようにも見受けられる。これは、日本のみならず国際的な時代の趨勢といっても良いであろう。

『道徳感情論』

では、スミス思想の基盤である道徳理論はどのようなものであったのか。

スミスが自らの道徳思想の起点に置くのは同感

sympathyである。これは共感と訳されるときもあるが、いずれにせよ、想像して他人の立場になることができるという人間本性上の能力を示している。この同感とは、現代の脳科学者は empathy として最注目しているものと近似(あるいはほぼ一致)しており、その点でスミスの現代的可能性を見る見解もある(例えば、Samuel Fleischacker, *Bring Me Being You: Adam Smith and empathy*, The University of Chicago Press, 2019)。

いずれにせよ、人は他人の行為を見たときに、同感能力により、その人の立場になってみて、自分で同感できるかどうかを判断する。同感できれば相手の行為を是認し、同感できなければ否認する。その際、相手の行動の動機(良いことをしようとしたのか、そうではないのか)から、相手の行動を評価しようとする。振り返って、他人もまた我々自身の行為を同感の対象にしている。その際、自分の行為を、相手は是認すれば嬉しく思い、否認すれば不快や悲しみを味わう。人は、他人の同感を得ることで喜びを得る。それがスミスにとっての人間本性であり、したがって、スミスは人間が必ずしもっぱら利己的だとは考えない(ただし、利己的である側面を否定しない)。

その際、人は、他人によって自らの行為を評価されていることに気づき、他人から同感されようとし、同感を得られないことや否認されることは避けようとする。そのことから、人は、他人の憤りの対象となることを避けようとする。人は、他人を侵害している人を見ると、その人に対して憤りを感じる。そのような侵害者への憤りの感情から、そのような人は処罰されるべきだとする処罰感情が生じる。スミスによれば、これが正義の起源である。刑罰のような、犯罪を防ぐための法は、この処罰感情を起源としているのである。これは感情に基づくがゆえに暴走しうる。しかし、それに歯止めがかかるのは、人は他人の同感を得ようと常々しており、他人の同感が得られないような、極度の怒りの感情の発露を避けようとするからである。

そして、人は、また、利己心も同感の対象にする。人は、勤労の人を見ると、それが自分のためにしていることであっても、是認する。逆に、放埒な振る舞いで自分の身を持ち崩す人に対しては同感しない。このように、人は利己心をも同感の対象にすることから、逆に、利己心は同感の対象にされており、したがって、人は他人を

侵害するような、したがって同感を得られないような利己心の発露を避けようとする。

こうして、他人とのコミュニケーションの中から、スミスは社会のルールが形成され、利己心・経済活動も破壊的とはならないことを述べる。このことにより、スミスは、人の行動は基本的には自由であるべきだという自由主義の理論的根拠を与えた。

しかし、スミスは、教条的な自由主義者ではなかった。とりわけそのことが明らかになるのは、『道徳感情論』第六版（1790年）である。死の年に書かれたこの版は、初版とは相当内容が異なることが知られている。そこで、スミスが注目するのは、同感というメカニズムそのものから、正義の感情も利己心も暴走するということである。正義は怒りの感情に基づく以上、無実の人を集団で攻め立てたりする危険性をはらむ。利己心は、過剰な富裕の崇拝を生みがちである。このような人間本性の「腐敗」に対して、スミスは、自分をあたかも他人から見られているかのように律する「公平な観察者」に注目する。これは、普遍的正義の源泉として、アマルティア・セン（1933）の『正義のアイデア *The idea of justice*』

(2009年…邦訳は明石書店、2011年)が着目している。

『法学講義』

そして、『道徳感情論』の世界をベースにして成立するのが、『法学講義』の世界である。

そこでは、スミスは、正義の考え方が時代に応じてどう変わるかを、個々の法についての考えがどう変わり、その背後にどのような社会の変化があるかを説明することによって、明らかにしようとする。正義の観念は、法となつて結実する。しかし、法は時代により変わる。こうして、スミスは法学体系を、その時代による変化を軸に説明しようとする。『法学講義』は、スミスが単に抽象的な道徳や社会のルールにのみ関心を持っていたのではなく、具体的な法やその変化に関心があつたことを示している。その際、スミスは、人々の暮らし方によって法が変化したと考える。スミスの法学は、王侯貴族など法を作る人に焦点を当ててのではなく、そのような法を作る人の背後にある庶民の存在に着目するのである。いつの時代も人は社会のルールや道徳を守るが、それは庶民の暮らし方によって変化する。スミスはこのことに着

目する。

『国富論』

『道徳感情論』で、自発的に庶民が社会のルールを守り、秩序が形成されることを明らかにし、『法学講義』でその秩序が時代に応じて変化することを明らかにしたスミスは、『国富論』では、そのような時代に応じた秩序・法の変化をもたらす経済に着目する。スミスにとって、経済の主役は王侯貴族ではなく庶民である。庶民の暮らし方の説明が、スミスの経済学の意図である。

その際、豊かな社会と貧しい社会がなぜあるのかをスミスは考える。それが、庶民の生き方を大きく左右するからである。スミスは、それは分業によつてもたらされたと考える。分業とは、仕事をさまざまな過程に分割することであるが、その分割により、生産性が向上し、経済が成長するのである。

そして、その分業の深化をもたらすのが、市場の拡大である。市場が広がれば広がるほど、細かな仕事でも食べいてけるようになり、専門化が進み、分業が拡大するのである。

その市場は、基本的には、需要と供給が、価格の変動を通じて一致することにより調整される。そこで調整された価格（市場価格）は、生産費水準で決定され、労働価値により決定される価格（自然価格）と一致するとされる。こうして、のちに対立することになる、市場重視の経済学と、労働価値重視の経済学両方の源流にスミスはなるのである。

そして、市場という空間は、労働者、地主、資本家がそれぞれ対等な立場から加わりうるものとしてあるが、それとは区別されるのは、そのような人々の経済活動を誰が支配するかの問題である。スミスにおいてそれは資本という単位で資本家が支配するものである。こうしてスミスは、市場と資本主義を区別している。

そして、市場は支配・収奪が伴いうる以上、ゆがめられることもありうる。スミスは考えていた。それが重商主義である。重商主義は、国家による経済介入を認めるが、それはスミスにとり、商人の政府への請願によって、政策が特定の商人によって有利なように歪曲されることを伴いがちなものであった。こうして、スミスは重商主義を批判する。

ただ、スミスは、政府の経済介入の全てを否定していた訳ではない。スミスは、経済の競争条件の整備や基礎インフラの整備には政府の役割が欠かせないと考えていた。こうして、スミスは、『国富論』の最終編である第五編において、防衛、司法、公共事業、教育のような役割が政府にあることを説くのである。

おわりに

こうして、見てくると、スミスが自由放任の人というのは誤りであることがわかる。スミスは政府の経済への役割を否定しない。同時に、重商主義のような形での恒常的介入を否定する。競争条件の整備が経済には欠かせないと考えていたのである。そして、その競争条件の整備を行う政府の役割は、庶民がどう暮らすかという時代背景に応じて変化すると考えていた。そして、スミスが見ていた社会の変化は、のちに資本主義と呼ばれるものになる社会の原型である。ただ、スミスにおいて、資本主義はルールや道徳なき利己的満足の最大化を意味していなかった。それは、道徳的であれという説教としてではなく、いついかなるときでも経済には道徳の考えが

きものであり、それがときに応じて変化するし、場合によっては危険なものになりうることをスミスは認識していたということである。経済の背景には人々の社会への考えがある。それがときとして暴走しうることをスミスは認識していた。この認識が、可能になったのは、スミスはより平等な社会を志向しながらも、同時に民主主義がベストとされる社会に住んでいなかったことによる。代議制が行われていたとはいえ、英国は人口の数パーセントしか有権者ではなかったし、その英国の政治体制は例外的だとも考えていた。さらに、スミスの時代の知識人の多くは、民主主義は大衆の暴走を招くとして懸念する古代ギリシャ・ローマの思想から深く影響されてもいたのである。こうして、スミスを通じて我々は、資本主義社会の政治的限界を捉えることができるのである。

その際、欧米と比べての、我が国の資本主義認識の違いは何かを考えることもまた重要である。資本主義は、世界的に広がったとはいえ、もとはといえば歴史的に特殊な一つの社会のあり方にすぎない。その独自性は何かを、我が国におけるスミス受容を掘り起こすことを通じて検討することも可能であり、筆者は『戦後経済学史の

群像』でその問題を部分的に考察した。戦後の経済学史家は、知識人として大衆にも広くその著作が親しまれた。それらの人々は、日本社会の考察は、欧米経済学の言語の導入なしにはできないという矛盾を認識した上で、あえて日本社会の有り様を析出しようとしたのである。それらの人々は、英米経済学を研究しつつ、日本社会とは何かも深掘りして考察した。スミスについて語りながら、その実日本の深淵を捉えようとした人々がいたのである。それらの人々を忘れ去ることは、欧米とは異なる社会で住まう我々を捉え損なうことになるのである。スミス生誕以来300年の知的蓄積を知ることには、我々を知ることにつながるのである。

野原 慎司(のほらしんじ)

1980年、大阪府に生まれる。京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士(経済学)。現在、東京大学大学院経済学研究科准教授。専攻は、経済学、経済学史、社会思想史、経済・社会哲学。主な著書に、『戦後経済学史の群像——日本資本主義はいかに捉えられたか』(白水社、2020年)、『アダム・スミスの近代性の根源——市場はなぜ見出されたのか』(京都大学学術出版会、2013年)、『Commerce and Strangers in Adam Smith (Springer, 2018) など。

15分で読む 生誕300年目のアダム・スミス ブックガイド

スミスの著作

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
Oxford University Press	0199269563	<i>An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations</i>	Smith, Adam. R. H. Campbell, A. S. Skinner, and W. B. Todd (eds.)	£ 145	1975
岩波文庫	4003410516	国富論 (1) (上記の邦訳)	水田洋監訳、杉山忠平訳	1130	2000
同上	4003410523	国富論 (2)	同上	1010	2000
同上	4003410530	国富論 (3)	同上	1130	2001
同上	4003410547	国富論 (4)	同上	1070	2001
Oxford University Press	0198281894	<i>The Theory of Moral Sentiments</i>	Smith, Adam. D. D. Raphael and A. L. Macfie (eds.)	£ 212.5	1976
岩波文庫	4003410561	道徳感情論 (上) (上記の邦訳)	水田洋訳	1130	2003
同上	4003410578	道徳感情論 (下)	同上	品切れ	2003
Oxford University Press	0198285700	<i>The Correspondence of Adam Smith, Second Edition</i>	Smith, Adam. E. C. Mossner and I. S. Ross (eds.)	£ 290	1987
名古屋大学出版会	4815811075	イギリス思想家書簡集 アダム・スミス (上記の邦訳)	田中秀夫・坂本達哉監修、篠原久・只腰親和・野原慎司訳	6300	2022
Oxford University Press	0198281870	<i>Essays on Philosophical Subjects</i>	Smith, Adam. W. P. D. Wightman, J. C. Bryce, and I. S. Ross (eds.)	£ 197.5	1980
名古屋大学出版会	4815801977	アダム・スミス 哲学論文集 (上記の邦訳)	篠原久・須藤壬章・只腰親和・藤江効子・水田洋・山崎怜訳	品切れ	1993
Oxford University Press	0198281887	<i>Lectures on Jurisprudence</i>	Smith, Adam. R. L. Meek, D. D. Raphael, and P. G. Stein (eds.)	£ 300	1978
岩波文庫	4003410585	法学講義 (上記の邦訳)	水田洋訳	1260	2005
名古屋大学出版会	4815806996	アダム・スミス 法学講義 1762-1763 (上記の邦訳)	水田洋・篠原久・只腰親和・前田俊文訳	6600	2012
Oxford University Press	0198281863	<i>Lectures on Rhetoric and Belles Lettres</i>	Smith, Adam. J. C. Bryce (ed.)	£ 197.5	1983
名古屋大学出版会	4815805005	アダム・スミス 修辞学・文学講義 (上記の邦訳)	水田洋・松原慶子訳	4200	2004

『国富論』をはじめとするスミスの原典はLiberty Fundよりリブリント版が出版されている。

スミスに関する海外の研究文献(ただし邦訳のあるものに限る)

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
Cambridge University Press	0521238915	<i>The Science of a Legislator: the natural jurisprudence of David Hume and Adam Smith</i>	Haakonssen, Knud		1981
ミネルヴァ書房	4623034208	立法者の科学——デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスの自然法学(上記の邦訳)	永井義雄・鈴木信雄・市岡義章訳	4800	2001
Cambridge University Press	0521292887	<i>Adam Smith's Politics: an essay in historiographic revision</i>	Winch, Donald		1978
ミネルヴァ書房	4623018680	アダム・スミスの政治学——歴史方法論的改訂の試み(上記の邦訳)	永井義雄・近藤加代子訳	品切れ	1989

スミスに関する我が国の研究文献

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
日本評論社		スミスとリスト——経済倫理と経済理論	大河内一男	品切れ	1943
未来社		経済学の形成時代	小林昇	品切れ	1961
有斐閣	4641064645	アダム・スミスと常識哲学——スコットランド啓蒙思想の研究	篠原久	品切れ	1986
日本評論社		アダム・スミスの市民社会体系	高島善哉	品切れ	1947
岩波新書	4004110705	アダム・スミス	高島善哉	820	1968
名古屋大学出版会	4815805197	『国富論』を読む——ヴィジョンと現実	竹本洋	6600	2005
多賀出版	4811538112	「天文学史」とアダム・スミスの道徳哲学	只腰親和	品切れ	1995
御茶の水書房	4275021120	アダム・スミスの自然法学——スコットランド啓蒙と法学の近代化の帰結(増補第三版)	田中正司	7200	2019
名古屋大学出版会	4815801571	スコットランド啓蒙思想史研究——文明社会と国制	田中秀夫	5500	1991
中公新書	4121019363	アダム・スミス——『道徳感情論』と『国富論』の世界	堂目卓生	880	2008
御茶の水書房	4275015655	経済学の成立——アダム・スミスと近代自然法学	新村聡	3800	1994
京都大学 学術出版会	4876982639	アダム・スミスの近代性の根源——市場はなぜ見出されたのか	野原慎司	3800	2013
白水社	4560098172	戦後経済学史の群像——日本資本主義はいかに捉えられたか	野原慎司	2200	2020
未来社	4624320294	アダム・スミス研究(新装版)	水田洋	5800	2000

一書店現場から一

今日も今日とて消費されない本を売る

小谷 輝之（葉々社）

二〇二二年四月、東京・梅屋敷に本屋「葉々社」を開店させてから、早一年が過ぎようとしている。あつという間といえはそのとおりだった気もする。

葉々社は十坪程度の広さしかない。このスペースに人文・社会科学・自然科学、文学、エッセイ、哲学、詩・短歌、言葉、デザイン、芸術関連書を並べている。新刊は二千冊程度しか置けないため、必然的に売る本を厳選する必要がある。その基準は以下の基本ルールに基づいている。

- ・ベストセラーは置かない
- ・流行に流されるような本は置かない
- ・自己啓発やビジネス書等、一度読めば役目を終えるような本は置かない

文末が「置かない」と否定形になっているところがポイントで、それはつまりそのような本は売りたいくないということと同義である。

では、どんな本を売りたいのか。

- ・ ものとを考えるきっかけになる本
- ・ 造本が美しい本
- ・ 読者の手元に長く置いてもらえる本

「売れる」から仕入れるのではなく、「売りたい」から仕入れている。

すべての作業をひとりで考えて、ひとりで実行するため、ある程度は基本ルールに忠実に仕入れられる。

小売の基本は安く仕入れて高く売る、だと思うが、本は再販売価格維持制度があるため、原則的には安くも仕入れられないし、高くも売れない。しかも商品としての本自体は複製品であり、他店との差別化も難しい。

では、街の本屋として何ができるのかを考えたとき、地域のお客さんの読書環境を整えることが答えのひとつになるような気がしている。

土日は遠方より来店されるお客さんもいるが、平日はおもに地域の方々がお客さんになる。

葉々社の客層は、二十代から七十代までと幅広く、読書傾向もさまざまだ。小説やエッセイを好まれる人、自然に関する本が好きな人、歴史や文化史を学び直している人……。最近、お客さんの認知度が高まってきたからなのか、ようやく差別やジェンダー、障がいなどの社会問題をテーマにした本が少しずつ売れるようになってきた。

開店当初は少なかった注文も現在では常時二十冊程度あり、便利に店を活用してもらっている。年配のお客さんのなかにはアマゾン知らない人もいるし、クレジットカードを持っていないため、ネットショッピングができない人もいる。隣の蒲田まで足を延ばせば、大型書店のチェーン店があるものの、足が悪かったり、歩行に困難が伴ったりする人にとっては、自宅の近所にある街の本屋は、心強い存在であるといえるのかもしれない。

一月からは出張本屋を開始した。場所は葉々社から徒歩五分程度の東邦大学医療センター大森病院。地域の総合医療を担う基幹病院である。このなかにある「からだのとしよしつ」という図書スペースの一角を借りて、週に一度、病院の入院患者や付き添いのご家族、病院内で働くスタッフを対象に本を販売している。

この企画も基本的には地域のお客さんの読書環境を整えるという考え方に基づいており、葉々社として実現可能な企画を書類にまとめて、大森病院の院長先生に提案したところから始まる。本屋は待つ時間が長く、お客さんが来ても来なくても毎日同じ時間に店を開けて、閉めることが、本屋を運営するうえで大事なポイントになるわけだが、より多くのお客さんに本を届けようとしたとき、店を飛び出し、外の世界に本屋をアピールすることも大切になる。

本屋を始める際、数字の目標を立てた。ひと月、百万円の売上。これだけあれば本屋の収入だけでなんとか生活できると考えたのだ。葉々社は月二十五日程度の営業日なので、一日あたり四万円の上売があれば達成できる。本に置き換えると、二千円の本が月五百冊売れば実現可能だ。しかし、開店当初からなかなか厳しい闘いが続いている。

- ・五月 四三〇冊
- ・六月 三五二冊
- ・七月 二八五冊
- ・八月 二七六冊
- ・九月 二八五冊
- ・十月 三五六冊
- ・十一月 三三九冊
- ・十二月 二二七冊

右の数字から読み解けることはふたつ。初月は開店特需のため数字がよく、暑さが厳しい夏場は数字が悪いということ。秋になり明らかにお客さんが街に戻り、数字も回復しているが、夏が暑いという事実はいくらも変えられないため、今年の夏は何かしらの対策が必要になる。

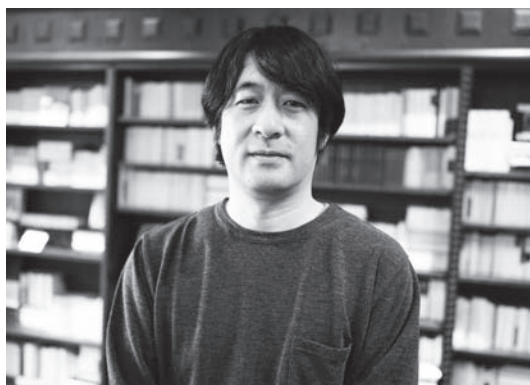
本の売上はおそらく飛躍的には増えないだろうと考えている。増やすための工夫や努力は怠ら

ないけれど、それでも、この業界がきわめて薄利であることを目の前にすると、本以外の売上も作らなければならない。私の場合は、ずっと雑誌や書籍の編集者をしていたこともあり、フリーの編集者として、知り合いや古巣から仕事をふってもらっている。加えて、葉々社としての出版事業も開始。好きな人と好きなものを制作し、販売するという試みも始めている。

お客さんに何度も足を運んでもらうために必要なもののひとつが店内の展示スペースで実施するフェアである。葉々社の場合は、小上がりの壁にマグネットボードを埋め込み、月一回のペースで展示を入れ替えている。これまで版画作家やイラストレーターの展示をはじめ、クオン、ナナロク社、ミネルヴァ書房など、出版社の力をお借りして読者のためのフェアを展開した。

なかでも来場者数がきちんと売上の数字に反映されたのが、ナナロク社といっしょに作り上げた「造本展示」だ。本企画では、ナナロク社の本のなかでも特に造本が美しい本を取り上げ、装丁の説明や使用している用紙等の解説を行った。土日・平日、また世代を問わず、多くのお客さんに展示を見てもらい、一カ月で合計百冊の本を売り上げた。この結果は、ナナロク社という出版社が常日頃からお客さんとコミュニケーションをとり、詩や短歌のジャンルを地道に耕してきただからこそもたらされたのであろう。

フェアを実施していて感じるのは、本が売れる理由と売れない理由の境目は何なのかというものだ。ベストセラーを置いていない店なので、平台に並べておけば勝手に本が売れていくということとはほばない。どんな本で、どこがオススメなのか、出版社のことを同時に説明しながら、お



著者近影

客さんと会話をする。すると興味を持ったお客さんがフェア本のなかから一冊、二冊と手にとってくれる。つまり、いい本なのに売れないのは、その本にかける愛情が不足しているからなのだと思う。刊行点数が多い現状では、その傾向はより強くなるが、フェアを通じて、自分自身が読みたい本、読んでもらいたい本を、新刊・既刊にこだわらず、選書してお客さんに届けていきたい。

商品サイクルがどんどん速くなると、仕入れの回数が増えてしまい、その結果、仕入れ過多になることが多い。これではいつまでたっても黒字にならない(葉々社は基本すべての書籍を買切で仕入れているため、売れないからといって返品ができない)。本屋としての鮮度を保つため、ある程度の新刊は必要だが、それでも私は既刊のなかから良書は発掘したい。発行年月日が最近かどうかではなく、売れたいかで仕入れる本を選びたい。

そこで二〇二三年はひとつのアイデアを実行に移すつもりだ。

それは一冊の本を、一年間という時間をかけて、ゆっくりとお客さんに案内すること。選んだ

本は、『パトリックと本を読む 絶望から立ち上がるための読書会』（白水社）。

二〇二三年はこの本を愛し、お客さんにオススメする。結果がどうなるかは想像するしかないが、少なくとも後悔はしないだろう。

小谷 輝之（こたにてるゆき）

図書館、出版業界を取り巻く情勢と提案

菊池 壮一（日比谷図書館文化館）

こんにちは、日比谷図書館文化館の菊池でございます。

もう、多くの方がご存じかと思いますが、私は長いこと書店リプロに勤務し、2015年7月20日池袋本店を閉店させるまで責任者を務めておりました。翌年、池袋本店の整理業務を終了させた後、リプロを辞し少しの時間において、日比谷図書館に着任させていただきました。6年経って思うことを、少しお話しいたします。

なお、現在日比谷図書館文化館の図書部門は（株）図書館流通センター（以下TRC）が指定管理で運営しており、私も所属はTRCであります。但し、本文章はあくまでも菊池の私見であるところ認識いただければ幸いです。

1 日比谷図書館文化館について

日比谷図書館文化館は、1908年東京市立日比谷図書館としてオープン。1945年の東京大空襲で焼失するが、1957年現在の三角形の建物で再出発。以降都立中央図書館の役割を担うも、2009年石原都知事時代に千代田区に移管。2年間の修理・改装や資料の移管作業を経て2011年千代田区立日比谷図書館文化館としてリフレッシュオープン。その時から指定管理もスタートしている。

改装によって、地下に200名収容の大ホールとレストラン、1Fにそれぞれ70坪規模の常設展示室（千代

田の歴史展示」と特別展示室（我々でネタを探して展開）、本文具の販売も行うカフェ。2F・3Fが図書館（この時児童書はすべて都立多摩図書館に移管され、日比谷は児童書を取り扱わないことに）、4Fに60名収容の小ホールと25名キヤパの会議室が2部屋、明治の経済人内田嘉吉の蔵書を中心に貴重書を集めた特別研究室、さらには区の文化財課も同居することになった。

会議室やホールを使った講演会（日比谷カレッジと呼んでいる）やワークショップの展開、図書フロアを使った各種展示（ブックフェア）を定期的・計画的に開催。

蔵書は約22万冊。千代田区立図書館の本館は九段の区役所上にある千代田図書館で、蔵書数はほぼ同数。千代田は全方位の収集、日比谷は特別館という位置づけで、収集の中心は「アート」「ビジネス支援」「地域資料」。都立多摩図書館に譲った児童書については、住宅街にある四番町図書館が収書を担っている。

2 図書館と出版業界

日比谷の紹介をざっとさせていたが、出版業界

の中ではどうも図書館はよく思われていないようだ。大きな要因は、「住民のリクエスト」を理由にしたベストセラーの複本問題、エンターテインメント系の文庫本やノウハウ本の収集、「おまえら無料貸本屋じゃないか!」ということであろう。

千代田区には、上述の3館の他に、小学校隣接の神田まちかど図書館、昌平まちかど図書館がそれぞれ3万冊程度の蔵書で学校と連携しつつ存在しているが、区は出版を区の重要産業と考えており、我々も出版社、書店、古書店、著者に極力ダメージを与えないよう配慮をしている。

新刊は、TRCが毎週発行する「週刊新刊全点案内」からまず各館が欲しいものを選び、その週内に全館のデータをもちよって討議・調整し、発注している。基本的に1館が同じアイテムを2冊以上仕入れること（複本）を認めていない。

千代田図書館は、館内のアクリルケースで、区内の古書店を案内するミニ展示を常に行っているし、神保町には出張所を設けて「神保町ツアー」を企画しお客様の街歩きに同行している。

四番町図書館は、自館での読み聞かせはもちろんだが、やはり地元の書店のミニホールなどを使って「読み聞かせショー」を企画し、その書店に本を売ってもらったりしている。

日比谷も1Fのカフェ内にショップがあるが、この本はTRC以外の書店に委託。またコロナ前は、年に1回か2回、出版社や書店との討論会を（一般の人も参加できる）公開で行っていた。その議論は「千代田区だけでなくもっと広げていこう」という段階で止まっているので、コロナ明けにまた継続していく予定である。

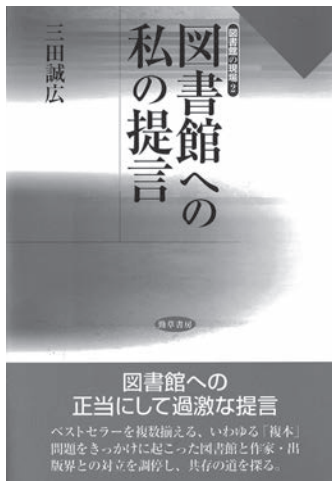
というのが千代田区の現状で、千代田区の中では（完全ではないかもしれないが）、何とか共存しようという姿勢を出版界各業種が共有しているかなと思っている。

しかし、他の行政区では一時期ほどひどい状態ではなくなってきたようであるとはいえ、積極的に出版界全体の問題に関わっていくようにしている図書館は、まだまだ少ないのではないだろうか。

3 図書館も借りる側も変わらなければならない

少し前、新潮社の社長は「新刊は発売1カ月以上たつてから置くようにしてほしい」、文藝春秋の社長は「文庫は版元の利益の源泉。置かないでほしい」と言った。作家の三田誠広は日本文藝家協会副理事長の立場で、「図書館で貸し出された本については公共貸与権に基づき、応分の対価を著作権者に支払うべき」と発言して『図書館への私の提言』（勤草書房）を著した。

それらの意見は一々ごもっともなのであるが、図書館



はいくつかの法律で以下のように定義づけられているのである。

・図書館法2条 定義

1 この法律において「図書館」とは、図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設で、地方公共団体、日本赤十字社又は一般社団法人若しくは一般財団法人が設置するもの（学校に附属する図書館又は図書室を除く。）をいう。

・図書館法17条 入館料等

公立図書館は、入館料その他図書館資料の利用に対するいかなる対価をも徴収してはならない。

・文部科学省「公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準」平成十三年七月十八日

二 市町村立図書館

(一) 運営の基本

市町村立図書館は、住民のために資料や情報の提供等直接的な援助を行う機関として、住民の需要を把握するよう努めるとともに、それに応じ地域の実情に即した運営に努めるものとする。

(二) 資料の収集、提供等

①住民の要求に応えるため、新刊図書及び雑誌の迅速な確保並びに他の図書館との連携・協力により図書館の機能を十分発揮できる種類及び量の資料の整備に努めるものとする。また、地域内の郷土資料及び行政資料、新聞の全国紙及び主要な地方紙等多様な資料の整備に努めるものとする。

②多様な種類・内容の視聴覚資料の収集に努めるものとする。

③電子資料の作成、収集及び提供並びに外部情報の入手に関するサービス等に努めるものとする。

④本館、分館、移動図書館等の資料の書誌データの統一的な整備や、インターネット等を活用した正確かつ迅速な検索システムの整備に努めるものとする。また、貸出の充実を図り、予約制度などに

より住民の多様な資料要求に的確に応じるよう努めるものとする。

⑤資料の提供等に当たっては、複写機やコンピュータ等の情報・通信機器等の利用の拡大に伴い、職員や利用者による著作権等の侵害が発生しないよう、十分な注意を払うものとする。

公共図書館はその名の通り、公共の施設であるから、上記の法律や通達は遵守である。それを盾にしたわけではないのであろうが、出版業界全体に積極的な気を配ってこなかったというのはいまだ事実である。

しかし、今後もそれを続けていくことはすべきでないし、業界からさらに強いプレッシャーを受けるのは間違いないところであらう。

公共図書館が戦後から今に至った流れもおさらいしておこう。

戦後の公共図書館は、GHQの民間情報教育局(CIE)が日本各地に設置したCIE図書館に翻弄されるなどしつつも、連合国軍による占領の終焉によって、

ふたたび自主運営が再開される。しかしながらそれは、長いこと多くの市民が「勤勉な学生や知識人が使用する施設」という認識を持っていたために、中々活性化せずにいた。

それを打ち破ろうと1963年に日本図書館協会(以下JLA)が刊行したのが『中小都市における公共図書館の運営』(『中小レポート』)であり、それを日野市立図書館で実践して成功を収めた経緯を収録した『市民の図書館』(JLA)が1970年に出版される。その両方に関わったのが前川恒雄である。

前川はJLAの事務局員として『中小レポート』作りをリードし、日野市立図書館の館長として変革に取り組んで、『市民の図書館』執筆の中心となった。その中に3つの指針を掲げている。

すなわち、

- ①市民の求める図書を自由に気楽に貸し出すこと
- ②児童の読書要求にこたえ、徹底して児童にサービスすること
- ③あらゆる人々に図書を貸出し、図書館を身近に置くために、全域へのサービス網をはりめぐらすこと

……である。

日野市立図書館は貸出冊数が急増。子供から老人まで、今まで本を読まなかった人たちが図書館に訪れるようになり、中小公立図書館の大成功例として全国から注目される。『市民の図書館』は図書館員のバイブルとなつて、1976年には増補版が刊行されている。そして前川は偉大な指導者・実践者としてあがめられることになる。その後それを範とする図書館が続出するが、結果的には、貸出冊数を誇る「貸出至上主義」、利用者の希望に何でも応える「異常複本現象」「ベストセラー追求主義」の出現を招いてしまったと言えよう。



図書館が、今まで入れることのなかったエンターテインメント系の本を扱うようになり、それまで商売になっていた貸本屋がバタバタとつぶれていったのは歴然たる事実である。

書籍の売上のピークは1996年で、1970年代は出版社も書店もイケイケであったから、図書館の動きをさほど気にしてはいなかった。むしろ貸本屋のほうが書店にとっては邪魔者と思われていたから、興味を示した書店は皆無だったのではないだろうか。私も恥ずかしながら『市民の図書館』を精読したのは図書館に勤務するようになってからである。

そういった無関心にも助けられ、図書館はどんどん増殖していく。今後も図書館は市民のためにあるべきであるが、「定義」や「公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準」をそのままにしておくのは疑問と思っているのは私だけではないだろう。

一方、借りる側も襟を正すべきである。今やネット全盛の時代で、「情報」はほぼ無料で入手できるようになってしまった。「世の中、タダで済むものはなんでも

タダで」の思想が充満しているように見える。

図書館を「無料貸本屋」にしようとしているのはそういう人たちの責任でもある。人気作家の新作の予約があつという間に3ヶタに達したり、エンターテイメント系の文庫本を堂々とリクエストしていく人々を見ると、正直悲しい気持ちになる。

私が幼いころ、決して裕福な家ではなかったが、父が新聞記者をやっていたせいもあり、本は家にたくさんあつた。図書館にも通つてはいたが、ボロボロの本が多く、また当時は赤痢や疫痢で子供が簡単に死んでいた時代だったことも影響したのかもしれない。母は「図書館の本はあまりきれいではないし、これと思った本は買って読んでこそ身につく」と言つて、よく本を買つてくれた。父は、私が中学生になる時に、書棚を新たに作り、百科事典と世界文学全集をプレゼントしてくれた。「ここが君のスタート。あとは好きに買って埋めていきなさい」の一言はいまだに心に残っている。

自分の家ばかりでなく、このころはほとんどの家庭が、戦争が終わつて未来に向かって他に迷惑をかけず頑張つて生きていこうという気持ちを持っていたと思う。すべて

でそこへ戻せとは言わない。少しか立ち戻つてみるべきではないだろうか。いい大人が年寄りが、あさましくあつてはならない、それなりの道徳心を持つべきと思う。

4 待っているだけの書店は自然に消えていく

一方、書店を見てみよう。書籍の売上は1996年以降減少が続き、最近では大型店や有名店の閉店も相次いで、昨年無書店市区町村は全1741市区町村中450を超えた。

街の書店の減少は文化の衰退につながるとして、2016年に旗を挙げたのが「街の本屋さんを元気にして、日本の文化を守る議員連盟（書店議連）である。

書店議連は自民党の衆参両院議員約40名からスタートし、現在150名を超えるまでになった最大規模の議員連盟である。昨年、その事務局を出版文化産業振興財団（JPIC）と日本書店商業組合連合会（日書連）が担うことになり、出版系媒体を中心に度々取り上げられるようになってきた。

2023年5月ごろには最終報告をまとめ、立法や

政策提言等具体的なアクションプランを提示する予定だそうだが、いくつか見えている施策の柱は、

- ① ネット書店の無料配送の制限
 - ② 公共図書館の複本購入や貸出開始時期のルール設定
 - ③ 入札時の値引き抑制
 - ④ ICTタグ導入推進支援
 - ⑤ 出版物への軽減税率適用
 - ⑥ 書店への助成制度強化
- 等になるようだ。

いずれも間違っていないと思うが、肝心の書店も自ら積極的に取り組む姿勢を見せるべきであろう。すでに志ある書店は、他から手を差し伸べられるのを待つのではなく、様々な模索を続けている。私と一緒にリブレットで活躍してくれた、辻山良雄の書店「T i e」、小国貴司の「BOOKS 青いカバ」、筒井陽一の「古書ラテラ舍」。いずれもカフェやギャラリーを設置したり、古本と新刊の並列販売、古本祭りへの積極出品、ネット販売、SNS発信等々工夫を凝らし順調だ。

西荻窪の「信愛書店」は街中の小さな書店。新刊の他に古書や紙モノ雑貨、棚はスタッフの読みたいもの。店

奥にはミニギャラリースペース。歴史ある書店なので学校用品(体操着、上履き、水着等)も取り扱っている。また、官庁や図書館への外売も手掛けており、TRC等の大手図書館納入業者に負けまいと、「リブレット」という別組織を創立し、図書のフィルムコート事業も開始した。

以下T w i t t e rの一部を紹介する。

ちょうど1年前の今頃、図書のフィルムコート作業の

Vol.04
2022.10.14
リブレット発行

「週刊読書人」に掲載

任意団体としてスタートしたばかりの小さな活動ですが、週刊読書人9月2日号に紹介していただきました！
この記事を見て、参加したいと声をかけてくださる方もいらっしゃると思います。仲間が増えるきっかけになりました。



ワーカースコープ

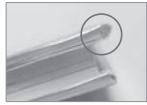
10月27日(木)午後、日本の労働者協同組合(ワーカースコープ) 委員会等幹事会・田嶋康利氏が、リブレットの視察と取材にいらっしゃいます。
ワーカースコープのこと、聞きたい、興味のある、という方はこれを機会にリブレットに参加してみませんか？

リブレット
堀島由紀子 原田直子

ちいさな手しごと
リブレット通信

リブレットの目指すもの

任意団体としてスタートしたリブレットですが、2022年10月には労働者協同組合法が施行されたことに伴い、ワーカースコープとして法人化し、安定した事業となることを目指します。
現在は本のフィルムコートのお仕事を中心に、メンバーがそれぞれ目標を持ちながら、ともに運営しています。



本とカバーの間に空間があります。この仕上がりでは、図書館で出し入れを繰り返すと潰れてしまいます。
浮かさずにぴったりと装着するのがよい設備です。私たちは、早く、きれいな仕上がりを目指としています。

フィルムコートの仕事

6月以降、ひと月に1000冊を超えるフィルムコートの依頼を受けるようになりました。図書館向けの本ですので、さまざまな本に施れる機会にもなり、よい経験を積むことができました。
メンバーの腕もめきめき上がっています！

問い合わせ libretto.suginami@gmail.com

事業を開始して、メンバーも増えてきたところです。

現在は杉並区、そして近隣の区立図書館、学校図書室のフィルムコート作業を手掛けています。

地域の図書館を地元で支えたい、読書文化を根付かせるしごとに関わりたい、本好きな仲間が集まってリブレットを立ち上げました。

目指すは労働協同組合、仕事の対価をあげるためにスキルアップすることと、地域の経済を支える事業体として成長することです。

手仕事が好き、得意な方、セカンドワークとしてやってみたいというかたはぜひ見学に来てください。

私は西荻窪からバスで高校に通っていたので、この店の存在はかなり前から知っていたが、当時は店主の原田福夫が編集する人文書コーナーで有名な店だった。その後私がリプロで出店担当になった時一度会ったようであるが（原田は書店組合の支部長だったはずで、出店のことだったろうからお互い良い印象はなかったのだと思う・笑）、改めて紹介してくれる方がいて店を訪ね、今現場を仕切っている原田の妻の原田直子とスタッフの鳩島由紀子に上記の話

を伺った時、結構感激してしまった。

これまで、歴史ある個人書店の店主とたくさん話をしてきたが、出てくる話は「TRCは図書館を独占してけしからん」とか「粗利が増えないと困る」「取次に何とかしてほしい」などとぼやくばかりで、ただただ他にお願いする、救いを待つ人ばかりで嫌になったことがある。

また、TRCに対抗しようとする組織が、「図書館への納品は地元の書店から、装備は地元の障害者施設に委託し、MARCO（刊行物の書誌情報）も他社のもので」的な提案をしたことがあるが、そんなこと、ひねくれ根性の書店がうまくリードできるわけないだろうと思っていただけに、信愛書店のチャレンジは強烈に私の胸を打った。昨年弊館では書店を応援すべく「本を贈る」の上映会を行って好評だった。この動画の元は日書連の支部である東京都書店商業組合が、都の特別支援事業から予算を獲得して作ったものである。

この映像が即売上増に結び付いたかどうかはわからないが、小さな書店1店ではできないことも、手を取り合ってまとまれば成果を出せる可能性があるということ

を証明したと思う。待っているだけの書店が救われるはずもない。前を向いて様々なことに積極的に挑んでいかれたらいいのだろうか。

5 取次の思い切ったアクションが必要である

さて取次である。苦境に立つ書店を何とかすべく「書店の粗利30%にします」「返品率目標クリアすれば報奨金を支払います」「マーケティング」「物流改善」「SCM銘柄」「特別正味商品」「新刊流通プラットフォーム」等々その取り組みは多岐にわたってきたが、振り返って見ると目標達成できたのか、特別な効果があったのか疑問である。

最近では、街の書店減少ばかりに目が行き、コンビニに「マチの本屋さん」を担わせようとしているが、コンビニと組むのはよほどの好立地店舗でない限り無理である(私も過去何店舗かチャレンジし煮え湯を飲まされてきた)。

大阪屋が実質アマゾンに潰され、大取次はもう2社しかなくなった。業界全体を考え2社協力して大きな策を打たねばならないタイムリミットはすぐそこ、あるいは

もう過ぎていくのかもしれない。

早期に着手すべきは、

① 2社共同(もしくは合併も視野に)して、アマゾンに対抗する組織を作ること(当然ながら丸紅構想等とも連携すべき)

② 配本制度の抜本的見直し(もしくは廃止)

③ J P I C の理事長・副理事長を出している立場として、正確な業界情報を書店議連に伝えることではないだろうか。

6 そして図書館は

そしておそらく一番変わらねばならないのが公共図書館であろう。公共図書館についてはいまだに「直営でなければだめ」だの「指定管理はレベルが低い」などと言いつける輩が存在する。私は前職で外販や、全国の店舗統括を経験してきたので、図書館関係者は昔から多く知っているが、はつきり言って直営だろうが指定管理だろうが、ちゃんとやっているとところはちゃんとやっている。ダメなところはダメである。

理想を言えば、直営がいいに決まっている。ただし、それには首長及び館長、スタッフの「良い図書館を作ろう」という強烈な意思と実行力が必要である。鳥取県立図書館や山梨県立図書館、荒川区立のゆいの森あらかわ台東区中央図書館等は素晴らしい成功例である（二部業務を外部委託しているところもあるが）。

指定管理でも、強い責任感を持ち直営以上に輝いている図書館も多い。まず我が千代田区は、区長、所管との協議・連携もうまく機能して、貸し出し以外の機能も充実させ、他自治体からの見学が絶えない。関東では、武蔵野プレイス、大和市文化創造拠点シリウス。鹿児島県の指宿図書館は、クラウドファンディングでカフェ付き移動図書館を購入して2021年の「Library of the Year」を受賞している。

それぞれの図書館に勤務するスタッフは、その歴史を守り、地域情報の提供や上級のリファレンス対応をしよう、新しい図書館像を作っていこうという意欲にあふれているように見える。直営うんぬん話はもう聞きたくない。

しかし、前述したが、まだまだ遅れているところがある

することも事実である。自分たちは出版業界とは別の世界にいたいと思っている人間は相変わらず多い。版元が訪問しても会おうともしない図書館員がいるそうだが、思い違いもいい加減にすべきである。出版社、書店が壊滅したら図書館も存続できないのだ。

まずは、

①出版社との情報交換推進

・新刊以外の既刊本や復刊の情報、所蔵資料の欠本調査は必ず役に立つ。有斐閣、国書刊行会、平凡社、原書房、作品社、オーム社、成山堂書店、藤原書店、ミネルヴァ書房、勁草書房、中央経済社（書ききれなかった版元さんごめんなさい）等はすでに、手を差し伸べてくれている。

②図書館の定義、法律、ルールの見直しに積極的に関わる

・「私たちは決められた通りやります」は美しくもなんともない。「新刊の貸し出しは発売1か月後に」や「エンターテイメント系の文庫は買って読むべき」は正しいのかもしれない。

・JLAも直営擁護はやめ、『市民の図書館』も一

旦は絶版にすべきであろう。前川恒雄の実績は偉大だが、もうそれにこだわっている時代ではない。

③「稼ぐ意識」を持つ

・「資料費削られるようだけど、仕方ないね」という声をたまに聞く。自分の図書館を良くしたいのなら「稼ぐ意識」を持つことである。前述の指宿図書館はクラウドファンディングで移動図書館を調達しているし、がんばる直営図書館はオリジナルグッズやDVD、関連書籍を販売している。上がった利益で資料を買い足しても文句を言う市民はおるまい。

といったところだろうか。

7 最後に

色々と書かせていただいたが、出版業界や図書館についてなかなか語りきれるものではない。今回も詳細に説明しないとわからない部分もあるかもしれないが、今後またフォローさせていただければと思っている。

図書館に来て最初に感じたことは、「書店の現場より

楽だな」ということであった。

そう、決定的な要素は「売上予算」と「返品」がないことだ。書店は利益を上げることが第一であるから、棚を担当すれば必ず売上予算がついてくる。返品は返品率目標があるから、それをにらみつつ荷造りしたり、保留したりで、心理的なプレッシャーもかなりある。

しかし、そういう日々の中で確実に図書館員より早く商品知識が身についていく。ただ毎日ルーティンをこなしているだけの図書館員と交換出向させてみることで、よって、業界全体の風通しを良くすることができそう。ろうし、討論会や講演会で交流を図るよりも効果的なのではないか。そんな思い切ったアクションも必要であろう。

ネット社会はこれからも様々なトラブルを起こしていくに違いない。「やはり信頼できるのはリアルである。人と人のふれあいが大切だ」に一旦戻ってくる日は遠くないはずだ。今動こう、力を合わせてその日に備えようではないか。

シリーズ「あいだで考える」創刊に寄せて

内貴 麻美（創元社）

十代の半ばごろから、ことばとの折り合いが悪くなった。自分が発したことばと、私とのあいだに、ずれがある。ことばが出てこなくてもどかしい思いをしたり、考えていることと正反対のことばが口から出てきて、激しく落ち込んだりした。私のことばが「私」そのものとして認識されてしまうことへの恐怖もあった。

そのような状態と並行して、本の世界に没頭していった。大学のころは図書館や書店に入り浸り、本棚に並んだ背表紙を端から順に追っていくだけで、心が安らいだ。あのとき私は、本の存在を介して「他者」や「世界」と対話していたのかもしれない。図書館や書店は、私を取り巻く現実世界と、さまざまな時空間とのあいだにあって、心を自由にすることを許してくれていたのかもしれない。

ない。そのころの気分が、本シリーズ「創刊のことば」の冒頭へと繋がっている。



二〇二二年一月、フリーランスの編集者で、緻密かつ創造性に溢れた仕事をされている藤本なほ子さんと共に、シリーズ「あいだで考える」の構想を立てた。世界では多様性が謳われる一方で、コロナ禍や戦争により至るところで分断が見られていた。また社会では効率が良いことに価値基準が置かれやすく、それは大きなことではありながら、他方で、数値で計れないものや、（一見）実利的でないものは、価値が低いと見なされやすい空気があった。

そうした空気は、十代の人たちを取り巻く環境にも、きつと充満しているだろうと思われた。あらゆる場面で競争が強いられるなかで、先行きの見えない将来に不安を覚えている若い人も少なくないのではと想像された。

シリーズ「あいだで考える」では、そうではない世界もある、ということを伝えたかった。十代の人たちが、このシリーズをとおして新しい価値観や考え方に出会い、いま自分が置かれている環境と少しあいだを取ってみることで、楽になったり、優しくなれたり、自由に発想したりすることができるようになれば……。そのような思いで、私たちは企画を立ち上げた。



シリーズ「あいだで考える」は、十代を中心読者としてつづすべての年代に向けた、人文書のシリーズである。このシリーズでは、物事を白か黒かで判断するのではなく、まずはあいだ、つまり「分からない」状態に留まり、物事を自分の目でよく見て考えることを大切にしている。分からない状態に留まるといえるのは、物事を短絡的に一般化することを避け、ステレオタイプや安易な刷り込み

に抗うことだ。だから、あいだに留まることは、一見なにも変化がないように見えて、実は多大な勇氣と知性と行動を要する。シリーズ「あいだで考える」の著者の皆さんと言葉を交わすたびに、そのことを学んでいった。



本シリーズ初回刊行の一冊『自分疲れ ココロとカラダのあいだ』は、潰瘍性大腸炎という難病の実体験に基づいたユニークな文学紹介活動をしている著者が、「自分自身でいることに疲れを感じる」「自分自身なのになぜかなじめない」といった「違和感」を出発点にして、文学や漫画、映画など多彩なジャンルの作品を取り上げながら、心と体の関係性について考察する本である。科学的なアプローチからはこぼれ落ちてしまう「私だけの心と体」を大切に見つめながら、「自分とは心なのか、体なのか」「自分とは何なのか？」を読者の目線で考えていく。

著者の頭木弘樹さんの文章の魅力はすでに多くの読者の知るところだと思うが、『自分疲れ』の文章もまた格別であった。『自分疲れ』での頭木さんの文章は、どこ

か一点に定められたゴール、つまり「正解」に向かって書かれているのではなく、今まさに答えが分からない状態で、思考と推敲を積み重ねながら、一つひとつ言葉を紡いでいるのだということが伝わってくる。頭木さんの文章を読んでいると、このシリーズで大切にしている「正解のない問いを考える」とは一体どういうことが快感として理解できてくる。

本書の最終章で、頭木さんは「自分疲れ」している人への素晴らしいヒントを示されている。心と体のバランスが不安定になりがちな十代の読者の方たちが、この本を取り、自分自身の心と体への考え方を広げ、少しでも楽に生活していく一助になればと願っている。



『自分疲れ』と同時刊行の『SNSの哲学 リアルとオンラインのあいだ』は、私たちの日常にすっかり溶けこんでいるSNSでのさまざまな現象(「ファボ」「炎上」「MeToo運動」など)を、「承認・時間・言葉・偶然・連帯」という五つのキーワードのもとに哲学の視点から捉え直し、SNSを使う私たち自身を見つめていく一冊であ

る。「SNSを使っているあなたは何者なのか?」という問いを深めながら、物事を哲学によって考えることのおもしろさと大切さを実践的に示す。

著者の戸谷洋志さんは、大学で哲学を教える傍ら、「哲学カフェ」などの実践を通じて、社会に開かれた対話の場を提案している。本書を読むと、哲学という営みが日常から切り離された小難しいものではなく、日々の生活や感情と地続きのものであることが実感される。

本書では、本編はもちろんのこと、「はじめに」と「おわりに」の文章にはひととき胸を打たれた。私たち一人ひとりが複雑な内面を持つ唯一無二の存在であることが肯定され、それぞれの胸の内側にある「考えたい」という気持ち、ひいては生きる活力のようなものを呼び覚ます、温かく力強いメッセージに溢れた文章だ。本書をきっかけに、哲学を志す若い読者が少なからず生まれるだろうと心から期待している。



「あいだ」への理解を深めてくれたのは、著者の皆さんはもちろんだが、本シリーズのブックデザインを担当し



初回刊行の2冊、頭木弘樹著『自分疲れ——ココロとカラダのあいだ』と、
戸谷洋志著『SNSの哲学——リアルとオンラインのあいだ』。

ている矢萩多聞さん、各企画のイラストレーターさんからも計り知れないほど多くの示唆を受けた。

矢萩さんにデザインを依頼したのは、なによりもシリーズのコンセプトに共感してくださると思ったからだ。いま、一般的には「シャープさ」や「分かりやすさ」が良しとされる傾向が強いなか、このシリーズは、もやもやとした感じや、重さや鈍さ、取り返しのつかなさのないものにしないことを大切にしたいと、藤本さんと私は思っていた。だから、矢萩さんとの最初の打ち合わせでは、「しゅっ」としていい感じ、洗練されていない感じ、スマートでない感じにしたい」「身体性や手作りの感じ、声の感じを重視したい」などと伝えた。矢萩さんは、これらの言葉を深く理解し、予想をはるかに超える素晴らしい仕事をしてくださった。十代向けだからといって不用意に「分かりやすく」しすぎないこと、微妙さや得体のしれなさ、不気味さを削ぎ落とすのではなく、それを残しながら惹かれる感じを大切にすること。それらはすべて十代の読者を「舐めない」ということに繋がっていて、矢萩さんからは、若い人へ向けた本を作るうえで大切なことを今もなお教わり続けている。

『自分疲れ』のイラストを担当している香山哲さんもまた、「あいだで考える」ことへの深い洞察を示してくださった。『自分疲れ』というテーマに対して、香山さんは絵を通して、著者の文章とはまた別のアプローチで語られている。アプローチは違うけれど本質的には感覚が通じていて、一冊の本のなかで絵と文章との素晴らしい化学反応が起こっている。

『SNSの哲学』においても同様に、著者の戸谷洋志さん、イラストレーターのモノ・ホーミーさんと言葉を交わし合い、そのたびに「あいだ」への新たな発見があった。本の言葉と読者とのあいだに身を置いて、それぞれの立場から意見を出し合い、相互に影響を受けながら変化して進んでいく、その過程そのものが「あいだで考える」の実践のようであった。



このようにして、著者、デザイナー、イラストレーターとの対話を重ねるうちに、シリーズ「あいだで考え



る」では、言葉で伝える情報だけではなく、絵やデザインから感覚的に伝えるものも大切にしたいという思いが強くなっていった。そこから生まれた関連企画が「あいだラジオ」である。「あいだラジオ」は、矢萩さんとそれぞれの本のイラストレーターさんとの対談を、ラジオ番組として公開する企画だ。デザイナーやイラストレーターの仕事は、著者の言葉と読者のあいだに身を置いて、本に形を与え、絵を描いていく、いわば「あいだの仕事」でもある。「あいだラジオ」では、矢萩さんが聞き手となり、どのようなことを考えながら絵を描いたのか、ご自身の普段の活動のこと、十代の頃に考えていたこと、影響を受けた本などをイラストレーターの皆さんに伺いながら、「あいだで考える」の本づくり、絵づくりの魅力と裏話をお伝えする。

「あいだラジオ」のもう一つの聴きどころは、読者の皆さんや書店員さんからのご感想やご質問を紹介する「お便りコーナー」である。本の作り手、売り手、読み手。さまざまな人と人のあいだで生まれる言葉や思いを大切に掬い上げていきながら、本シリーズが広がっていくことを願っている。

刊行ラインナップ

(2023年3月時点。2023年6月以降のタイトルと刊行年月は仮)

自分疲れ——ココロとカラダのあいだ	頭木弘樹	2023年4月
SNSの哲学——リアルとオンラインのあいだ	戸谷洋志	2023年4月
ことばの白地図を歩く——翻訳と魔法のあいだ	奈倉有里	2023年6月
風をおすレッスン——人と人のあいだ	田中真知	2023年8月
根っからの悪人っているの?——被害と加害のあいだ	坂上香	2023年10月
能力で人を分けなくなる日——いのちと価値のあいだ	最首悟	2023年12月
ハマれないまま、生きてます——こどもとおとなのあいだ	栗田隆子	2024年2月
ホームレスでいること——見えるものと見えないもののあいだ	いちむらみさこ	2024年4月
隣の国の人々と出会う——韓国語と日本語のあいだ	斎藤真理子	2024年8月
言葉なんていらない?——私と世界のあいだ	古田徹也	2024年10月
以下続刊		

◆

もう一つの関連企画として「あいだ新聞」もご紹介したい。「あいだ新聞」は、各書籍に初刷限定で挟み込み、著者の紹介や裏話、制作エピソードなどを伝える小さな新聞である。「あいだ新聞」のいちばんの読みどころは、各著者による「10代の失敗」コーナーだ。このコーナーでは、著者の皆さんに「十代のころにやらかした、恥ずかしくも愛おしい失敗」というテーマで寄稿していただく。成功はゴールという感じがするけれど、失敗には過程、つまり「あいだ」の感じがある。あの人にもこんな失敗があったのかと著者を身近に感じられそうな、イチ押しのコーナーになっている。

◆

このような関連企画も、十代の皆さんに楽しんでもらえることを念頭において作っている。ぜひ書籍と一緒に味わってもらえたら嬉しい。

◆

最後にもう一つ触れておきたいのは、本シリーズを通して出会った十代の皆さんのことだ。二〇二三年十月刊

行予定『根っからの悪人っているの？ 被害と加害のあいだ』（坂上香著）、同年十二月刊行予定『能力で人を分けるなくなる日 いのちと価値のあいだ』（最首悟著）は、いずれも著者と十代の皆さんとの実際の対話を本にする企画である。

対話の場で十代の皆さんは、それぞれの日々の生活に根ざした自分自身の考えや思いを、とても素直に、まっすぐに、自分だけの言葉で話してくださった。「あいだで考える」ということに対して、私たちオトナが想像もしていなかったような深い理解も言葉にして教えてくれた。シリーズを作っていく過程で、対象読者である十代の人たちについて、「今の子たちはあまり本を読まない」「忙しくて疲れている」といった想定で話をしてしまうことがあったが、こうして実際に十代の方たちとお会いして、それがいかにも一面的で肌理の粗い見方であるかを痛感した。本シリーズは、彼ら一人ひとりの存在に大きく影響を受けて形づくられていったことを記しておきたい。



二〇二三年四月、いよいよ本シリーズの刊行が始まる。ここに挙げきれなかった方々も含め、たくさんの人と人のあいだで、言葉と 생각이 折り重なり合いながら作られていった本シリーズが、まだ見ぬ読者の大切な一冊となることを願ってやまない。

2022年秋季グループ訪問報告

愛知・静岡方面

報告 郡司恵太(誠信書房)

● 期日…2022年11月2日(水)～4日(金)

● 参加メンバー…郡司恵太(誠信書房)、片桐幹夫(みすず書房)、東原亮佑(勲草書房)

● 訪問先(訪問順)

【愛知】三省堂書店名古屋本店、ジュンク堂書店名古屋店、ジュンク堂書店名古屋栄店、MARUZEN名古屋本店、名古屋大学生協書籍部南部店、紀伊國屋書店中部営業部、紀伊國屋書店名古屋空港店、正文館書店、ちくさ正文館書店、らくだ書店本店

【静岡】谷島屋浜松本店、静岡新聞社、MARUZEN & ジュンク堂書店新静岡店

● 感想

今回のグループ訪問は2019年以来的の実施で

あった。コロナ禍による中止をうけてのことである。2020年から始まったCOVID-19によるパンデミックは世界中を覆い、4月に緊急事態宣言が出された日本は、外出の自粛や催事の制限が行われた。ビジネスマンは在宅勤務に切り替え、ファミリー層は人混みを避ける、いわゆる「行動変容」が起こった。ターミナル駅やオフィス街は人流が減り、それらを商圏とする書店の売上に大きく影を落とした。ビジネス客の減少は深刻で、2022年11月には客の減少が理由で、東京のタクシーの値上げが15年ぶりに発表されたが、東京に続いて値上げを決めたのが、今回訪問の名古屋である。

利用したタクシーの車内で、運転手が1日20回ほど乗せていた、さる大企業の支社の営業マン達が営業先へ訪問する利用がごそとなくなった、と話してくれた。得意先への訪問をやめて、Zoomなどに切り替えたのだという。

「人が戻ってこない」。これは、今回の訪問では至ると

ところで耳にした。

インフレの問題にも触れなければならない。2022年4月ロシアのウクライナ侵攻に端を発するエネルギー・食料価格の高騰は、日本の家庭の可処分所得を逼迫させている。取次発表で書籍の売上がマイナス2桁月の月もあり、特に高額の価格帯である人文書の売上は強い逆風が吹いている。大学図書館の外商の現場では、インフレによる円安で、洋書が高くなってしまい、図書館の予算で国内の書籍を買う分が削られてしまっているという。円安のメリット面である、インバウンド客の増加については、愛知はインバウンド消費額が全国8位であることから、その効果は限定的なものであるようだ。

今回の訪問は、ワクチンの接種者が80%を超え行動制限は欧米に倣う形で解除されるも、感染者数は最大数であった第7波を過ぎても高止まりし、さらなる感染者数が予想される第8波の兆しも見える、11月に行われた2021年の巣ごもり需要が終わり、書店の皆さんは客の行動変容と、インフレによる購買意欲の減少によって苦闘を余儀なくされている、という状況であった。

東京駅に集合し、90分ほどで名古屋に到着。駅中の三

省堂書店名古屋本店を訪問。ターミナル駅の地域一番店であり、人文書の棚も量も十分、質も充実しており、貫禄がある。この立地にしてこの品揃えだからあの売上ということなのだろう。人文会は2021年に「本の街 神田神保町発！ 人文書フェア in 名古屋」というフェアをさせていたのだ。来年の23年2月に第2回を予定しており、西尾店長と大屋係長と協力して進めていく旨、打ち合わせをさせていたのだ。コロナ前と比べ、現状のお客の戻りは、休日のよい時で8割ぐらいなのだそう。

ジュンク堂書店名古屋店では、鈴木店長より店全体の棚の変更のお話を聞いた。棚を短くし、棚の端にテーブルを設置し、各棚でミニフェアや話題の新刊書を展開して、露出を確保し、賑やかさが演出されていた。棚を短くしたことで、書籍の数は減ったが、見せ方を工夫して、棚にボリューム感を持たせることに成功している。行動変容でビジネスマンが減った分、コミック棚を拡張し、ファミリー層にもリーチできるようにすることで、変化に対応されていた。

ジュンク堂名古屋栄店では大竹店長に売上の状況をお聞きすると、かなりの健闘ぶりに驚かされた。栄駅はア

クセスも良いということで、60代の男性のお客様が多く、購買意欲があるとのこと。病院がたくさん入ったビルに近い立地であることも、本を購入するにあたっでの動機づけになっているようだ。

MARUZIN名古屋本店では人文書担当の佐藤さんが、売上を求められる状況での選書についての話の中で「お客さんを信じたい。そう思って本を置いている」とおっしゃられたのが、心に残った。

スタッフが辞めたことで、さらに持ち場が広がっているとのことだったが、人文書の棚の品揃えは充実し、しっかりと整理されており、頭が下がる思いであった。

名古屋大学生協書籍部南部店に行き、安藤店長に話を聞く。ことコロナ禍の行動変容、という点においては、学生への影響は大きく、授業を受けたらまっすぐ帰る、というライフスタイルになっている、とのこと。リモート授業も相まって、平日の学生の生協への戻りはコロナ前の半分ほど、とのことであった。

紀伊國屋書店中部営業部を訪問。小野部長、望月課長より大学図書館の円安の影響をお聞きした。状況は逆風だが、版元ができる努力として、大学の先生の著作が出

た場合はチラシを配り、しっかり周知することで、図書館納入や関連分野の先生方が買ってくださるようつなげていく、という基本は変わらない、とのこと。

2日目は、名古屋駅前から高速バスに乗り、紀伊國屋書店名古屋空港店へ。ショッピングモール内のファミリ層のお店だが、人文会の「高校生のためのブックフェア」を入口すぐのところで展開いただいていた。手前味噌ながら弊社の諸富祥彦先生の著作が売れており、伊藤店長が意識しているところの「書店とは偶然の出会いの場」をまさに目の当たりにし、感激してしまふ。

正に地域の街の書店であるところのお店を3店続けて訪問。外堀通りに面した老舗、正文館書店では1部屋まるまる使った文庫、新書コーナーに圧倒された。同じ商圈に蔦屋書店の新店ができたことで、厳しくなった分外商に力を入れているとのこと。ちくさ正文館書店は、コロナ禍で書籍を減らしたが、平積みみのテーブルを増やしたことで、さらに訴求力が増し、本好きの心を捉えた店になっていた。らくだ書店本店は、コーヒーを飲みながら本が読めるファミリ層向けのお店と思いきや、専門書のラインナップと人文系ミニフェアの数々に驚かさ

れた。実際、人文系の売上が良いとのこと、良い意味でギャップが印象深いお店であった。

3日目の谷島屋浜松本店では、細川店長より、コロナ禍で夜、人が相対いなくなってしまった、とのお話を聞かせていただいた。人流が減ったその分、学生のブックハンティング等、外商に注力したい、とのことであった。永山副店長からは、人文系の書籍売り場にも季節感がほしい、とのこと、ミニフェアのご要望をいただいた。外商向けの書籍の情報の提供、無論ミニフェアでも、ぜひ協力させていただきたい。

静岡駅に移動し、静岡新聞社へ。新聞書評の制作現場の実際、というのがどういふものであるのかを、掛井さんより丁寧に解説いただく。静岡県内の書店員、図書館員が最も読んでもらいたい小説、児童書を選ぶ「静岡書店大賞」への協力など、地域と結束して盛り上げる、地域の力強さを感じた。

最後に訪問したMARUZEN&ジュンク堂書店新静岡店は、以前に一度訪れたことはあったが、当時よりもずっと棚が充実し、きっちりと新刊が並び、メンテナンスの手が入っており、瞠目した。そして、文芸書の工

島さんの手掛けた棚は、こんな売り方があったのか！と驚嘆すべき見せ方であった。工島さんにもっと注目が集まってほしい！

厳しい話を多く聞き、暗いムードのまま帰途につくことになるかと思われたが、確かに元気をいただくことができた瞬間はあった、充実の3日間であった。

大阪方面

報告 澤畑 壘（東京大学出版会）

● 期日…2022年10月24日（月）～26日（水）

● 参加メンバー…段塚省吾（紀伊國屋書店）、澤畑壘（東京大学出版会）、三木拓（法政大学出版局）

● 訪問先（訪問順）

大阪大学生協書籍部豊中店、紀伊國屋書店梅田本店、MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店、紀伊國屋書店グランフロント大阪店、梅田蔦屋書店、近畿大学生協ショップLeaf、近畿大学中央図書館、紀伊國屋書店天王寺ミオ店、ジュンク堂書店近鉄あべのハルカス店、喜久屋書店阿倍野店、ジュンク堂書店難波店、旭屋書店外商部、関西大学生協書籍店、ジュンク堂書店大阪本店、大学生協関西北陸書籍事業部

● 感想

大阪に関しても2年半ぶりの人文会グループ訪問である。コロナ禍を経験したこの間に市場と書店の状況はどうなっているのか、それを確認するのがおもしろい目的と

なった。

初日。

最初に訪問したのは大阪大学生協書籍部豊中店。いつもどおりベテランの依岡さんが温かく迎え入れてくれた。人文の担当は坂本さんで、キャリアは浅いものの、棚づくりを学ぶことに関しては積極的だ。実際、数か月前に版元がアドバイスしたことはきちんと形になっていたし、また、近日中に京都大学生協ルネや同志社生協今出川店へ見学に行くという。今後、大学生協らしい棚をつくってくれることを期待したい。

その後は梅田駅周辺の書店を訪問。紀伊國屋書店梅田本店では長谷川店長と百々部長代理が対応してくれた。相変わらず客数の多い店ではあるが、それでもコロナ前に比べれば8割程度だという。専門書の売れ筋も積極的に拾おうとしているとのこと、店長のすすめもあり、仕入課の武内さんにもご挨拶。情報交換を密にして、双方の利益としていきたいところだ。

続いて、MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店を訪問。高山副店長、福嶋さん、岡さんと、人文書に関し

ては熟達したスタッフが揃っているものの、ほかの業務との兼ね合いもあって、棚に触る時間を確保するのがむずかしいようであった。日本一大きな書店として期待も大きいゆえ、なんとか棚のクオリティを維持してほしいと思う。

紀伊國屋書店グランフロント大阪店では樋口店長にご挨拶。やはりコロナ禍で客数は減少したものの、次第に回復しつつあるとのこと。梅田蔦屋書店では、まず人文会メンバーだけで店内を見学。その後、担当の三砂さんと合流し、夕食をともしながら情報交換を行った。フェアの企画の立て方や、書籍のプロモーション方法まで、版元としても参考になるところが大であった。

2日目。

まずは近畿大学へ。生協ショップLeafを訪問し、担当の濱崎さんから現状などを伺う。教科書や研究費への対応を主とした店舗であり、新刊は事業連合の配制度をとおして入荷してくるとのこと。

続いて中央図書館を訪問。館長の八角先生と学生センターの岡さんに対応いただき、アカデミックシアターも

含めて案内してもらおう。近畿大学図書館の試みについては八角先生執筆の「図書館レポート」(『人文会ニュース』No.142)に詳しいので、ぜひそちらを参照してほしい。松岡正剛氏監修のビブリオシアターなど、注目すべき点は多々あるが、実際に訪問して何より強い印象を受けたのは、そこが学生とともに作り上げる空間になっていたことだ。学生による黒板アートがそこかしこにあったり、個室で学生が企業担当者と商品について意見交換していたりと、学生が主体となって作り出している活気があった。

その後は天王寺駅へ移動して、書店3店舗を訪問。紀伊國屋書店天王寺ミオ店は、立地の関係もあり、人文書スペースは大きくないが、そのぶん客層にあわせた品揃えが意識されているように感じた。ジュンク堂書店近鉄あべのハルカス店は、ハイクラスな百貨店にある店舗でありながら、専門書の売れ行きも好調だ。阪上店長と担当の前田さんによれば、客層にあった商品構成でなんとか売上確保を図っていると。喜久屋書店阿倍野店では関谷店長が対応してくださった。とくに専門書に関しては、ライバル店との差異化に頭を悩ましているようで

あった。

2日目最後はジュンク堂書店難波店を訪問。当店はフェアスペースも充実しているが、著者からの協力を得たフェアなど、通常の棚のなかや棚前のスペースでも企画的な展開を試みていた。北風店長、人文担当の日野さん、岩崎さんとは、在庫の持ち方や、哲学の棚の分類などについて熱く議論することになった。

最終日。

旭屋書店外商部を訪問。林部長、山村課長をはじめ、販売課のみなさんが丁寧に対応してくれた。コロナ禍当初は営業活動を自粛せざるをえなかったが、現在は活動を完全復活させているとのこと。教科書の需要や消化率、さらには円安の影響などについて情報交換した。

続いて、関西大学生協書籍店を訪問。訪問時には東京大学出版会のフェアを展開していて、その売れ行きも好調であるとのこと。山本さん、大石さん、原田さんに対応していただき、専門書の棚について話すだけでなく、近年の教科書需要や、今後の電子教科書の普及などについても意見交換することとなった。

次はジュンク堂書店大阪本店を訪問。ビジネスマンをメインの対象とした店舗ゆえ、在宅勤務の普及が少なからぬ影響を与えているのではないかと感じた。人文担当の松谷さんに伺ったところ、コロナ以降、心理的不安を抱える人たちを支援するような本が動いているという。他店ではなかなかない商品をお客様に届けたいのだという熱い気持ちも伝えてくれた。

最後は大学生協関西北陸書籍事業部を訪問。北田さんと、現在は東京の事業連合に所属する鯉迫さんと情報交換をした。「生協にとっても『コロナ・バブル』だった」と言っていたのが何より印象に残った。コロナからの2年間は、学生の店頭利用は減ったものの、教員の研究費消化が増えたので、結果として全体の売上はわるくなかったとのこと。また、オンライン授業の普及と教科書の販売などについても話を聞いた。コロナ禍当初は教科書の需要をうまく見通すことができなかったが、時間を経るにつれて需要予測は正確になってきているという。

以上が大阪グループの訪問記録である。今回は3日間で大阪しか訪問しないため、時間を持て余してしまうの

福岡・熊本方面

報告 乙子智（慶應義塾大学出版会）

ではないかと当初は少し心配していたが、実際の3日間
はまったく暇のない行程であった。最終日を除くと1日
の歩数も2万歩をゆうに超え、グループとしても濃密な
時間とするよう努めたつもりである。

訪問した店舗の担当者は、忙しい時期・時間帯であつたにもかかわらず、みな丁寧に対応してくださり、快く話をしてくださった。大阪グループの訪問を意義あるものにしてくださったことに、心より感謝したい。

● 期日…2022年11月9日（水）～11月11日（金）

● 参加メンバー…河内秀憲（筑摩書房）、荻原弘和（日本評論社）、乙子智（慶應義塾大学出版会）

● 訪問先（訪問順）

【福岡】 丸善博多店、紀伊國屋書店福岡本店、九州大学
生協中央図書館店、紀伊國屋書店福岡営業所、丸善ジュ
ンク堂書店福岡営業所、ジュンク堂書店福岡店、文喫
福岡天神、金修堂書店本店（11日に訪問）

【熊本】 メトロ書店熊本本店、熊本大学生協学生会館
ショップ、蔦屋書店熊本三年坂、長崎書店、荒尾市立図
書館、紀伊國屋書店あらおシティモール店

● 感想

今回訪問した福岡・熊本エリアは、ともに人文会としての訪問は2017年の研修以来、5年ぶりとなる。この5年間に、福岡では天神エリアの再開発が進行し、熊本では2021年4月熊本駅前にアミュープラザくま

もとが開業するなど、人流に影響を与える大きな変化がそれぞれで起こっている。さらに2020年に発生したコロナ禍が加わり、どのように影響を与えたのかをつぶさに確認することが本班の主目的となった。

初日、まず博多駅の丸善博多店と紀伊國屋書店福岡本店を訪問。両店ともに安定した品揃えを維持されていた。また、福岡県はリモートワークの導入企業がそれほど多くなく、緊急事態宣言発令時を除けば行動制限も厳しくない等、他エリアのターミナル駅の店舗よりもコロナ禍にあっても比較的に来客数は維持できていたとの興味深いお話しをうかがった。夏から秋にかけて外国人観光客も戻ってきたため、本来の状態に復調しつつある。人文書で言えば、両店ともに哲学分野の書籍の売上が好調ということで、これもコロナの影響によるものなのかどうか、興味深い。

次に、九州大学生協文系書籍店の後継として2021年4月伊都キャンパスにオープンした中央図書館店を訪問。伊都キャンパスは実に275ヘクタールもの広大な敷地を持ち、中央図書館店はその東側に所在している。周辺には文系学部その他、建築学部や大学院

の校舎が隣接しているため、専門書の需要が高い。その後、巢内専務理事のご厚意により、車で皎皎舎店へ移動。こちらのお店は教養課程の校舎（と同時にサークル活動の拠点）や理学部の校舎が近く、在庫している書籍についても教科書や教養書が充実している。訪問した2店の他にも伊都キャンパスには4店舗が所在しており、時間の都合でその全てを訪問できなかったことが悔やまれる。

博多市街に戻り、初日の最後は、紀伊國屋書店福岡営業所を訪問し、情報交換を行う。新型コロナウイルスの影響でしばらくはメールや電話、ポスト投函といった形での営業活動を行っていたが、現在では従来通り訪問営業が可能に。ただ、大学生の書籍に対する関心が相対的に下がり、スマホを利用したSNSやアプリ等の情報ツールへの親近感が高くなっているという。出版物においても販売策においても、若年層へ向けた取り組みの重要性を痛感した。

2日目は、まず丸善ジュンク堂書店福岡営業所を人文会として初の訪問。4名のスタッフで九州（鹿児島を除く）と山口県、広島県の大学および企業外商と非常に幅広いエリアで活動されている。その後、同じ建物に入っ

ているジュンク堂書店福岡店を訪問。2020年8月に以前の入居ビルより移転し営業を再開した同店は、元アパレルの店舗だけあって明るく開放感のある内装となっており、前の店舗から在庫量は三分の一程度になったとのことだが、それを感じさせない棚づくりをされていた。

次に2021年3月に開店した文喫福岡天神へ。百貨店の岩田屋に入っており、岩田屋主催のカルチャースクールの会場と隣接している。カルチャースクール参加者は当日の文喫の利用を無料にして、スクール参加後の交流の場となり、その後文喫の月額利用につながるなど、書籍との新しい出会いの場を模索されている。

その後、熊本へ移動し、2021年4月アミュープラザくまもと内にオープンしたメトロ書店熊本本店へ。店頭とは別に専門書を閉架書庫に納め、検索機で在庫を確認できれば専用カウンターへ依頼することで書庫から書籍を取り出せるという、新しいシステムを導入している。次に熊本大学生協学生会館ショップを訪問。現在では対面授業が復活しているものの、昨年・一昨年はほぼオンライン講義であったため、生協の存在を把握していない

学生も多く、現在はコロナ以前のように学生に利用してもらえよう学生への働きかけに努めている。

アーケード商店街へ移動し、蔦屋書店熊本三年坂を訪問。2021年に改装を行い、フロアの構成も大きく変更された。駅前のアミュープラザオープン後に主に若年層の流れが変わってきたということもあり、人文書を含む棚づくりの試行錯誤を進められていた。上通りに所在する長崎書店もまた2021年4月にリニューアルをしている。売り場面積は減少していたものの、「らしさ」を感じられるラインナップの棚を維持されていた。2日目はそのまま熊本市街に宿泊。

3日目、熊本市街から荒尾市へ移動し、2022年4月に移転・リニューアルオープンした荒尾市立図書館へ向かう（本図書館の詳細は、『人文会ニュース』No.140「荒尾市 図書館+書店プロジェクト、地域の活性化と本の力」参照）。「みんな」で作り上げる図書館というコンセプトのもと、地元の有明高専の学生と協同で作成した備品を使用した、荒尾干潟をイメージした装飾や地元の偉人・伝統文化の写真や衣装を展示するなど、非常に荒尾への愛着を感じさせるつくりとなっている。オープン以来、すでに



薦屋書店熊本三年坂での、訪問時にご案内したフェアの様子(2月撮影)

来館者は20万人を突破し(訪問時)、近隣の市・県からの来館者も多いとのこと。また、図書館に併設されている紀伊國屋書店あらおシティモール店では、当初図書館所蔵書籍との差別化した在庫を検討されていたそうだが、図書館で見つけた書籍の在庫の問い合わせ等もあり、想定されていなかった相乗効果も見られたとのこと。

その後、博多へ戻り、最後の訪問先の金修堂書店本店へ。店舗と外商機能を併せ持ち、高校・大学・企業への訪問も精力的に続けている老舗の本店。コロナの影響で来客は減ったとのことだが、専門書の棚づくりはしっか

りと維持している。

今回訪問した14の書店店舗・書店外商部・図書館のうち、実に半数以上がこの5年間のあいだに新規開店もしくはリニューアルをされており当該エリアの大きな変動を実感させられたが、同時にコロナの影響からだんだんと脱却している様子もまた感じ取ることができた。厳しい時期を経て、これまで以上に盛り上がっていくことを期待したい。

最後に、まだコロナが収束していない段階での今回の訪問を快く受け入れてくださった書店・図書館の皆様からお礼を申し上げます。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2023年4月現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
紀伊國屋書店	段塚 省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3124
勁 草 書 房	東原 亮佑	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春 秋 社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶 文 社	福士篤太郎	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠 信 書 房	郡司 恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青 土 社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿樂町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創 元 社	水口 大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑 摩 書 房	河内 秀憲	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑 壘	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社	荻原 弘和	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平 凡 社	登尾 純一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	三木 拓	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	片桐 幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋 弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉 川 弘 文 館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 片桐幹夫
 会計幹事 片山伸治
 書記幹事 水口大介

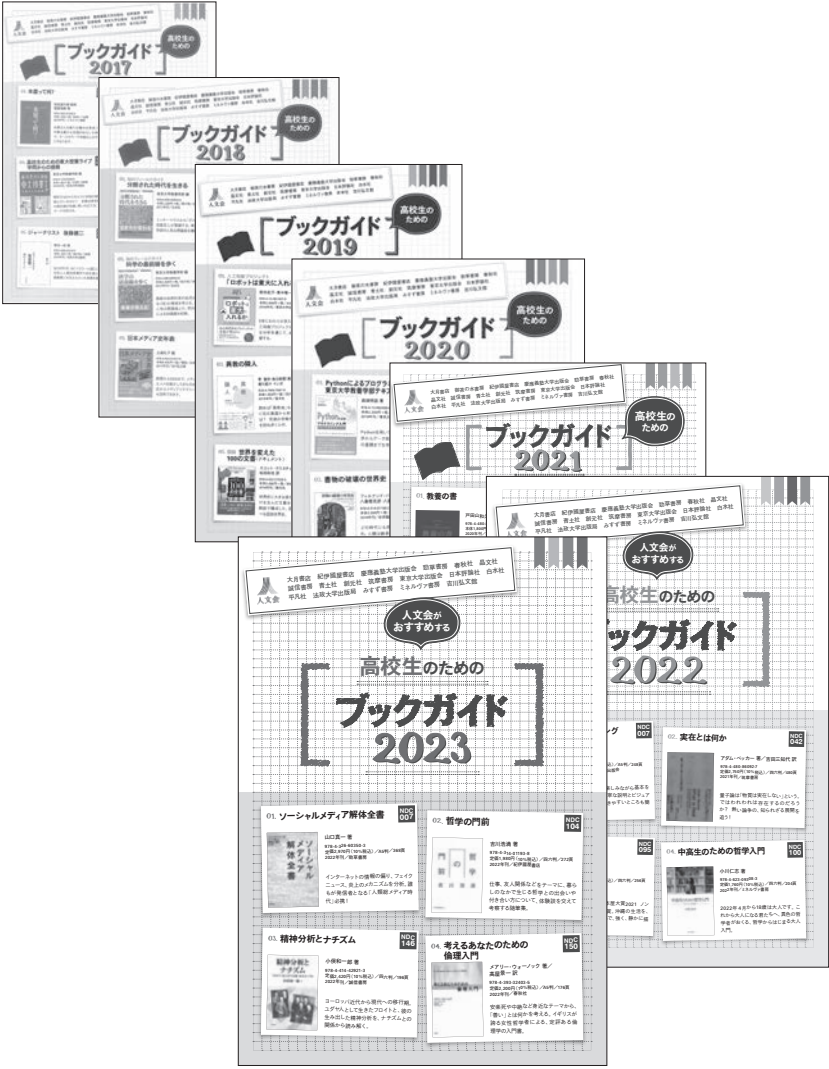
《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会 ◎吉岡 聡 ○段塚省吾・佐藤信治・福士篤太郎・郡司恵太・登尾純一
 調査・研修委員会 ◎森 卓巳 ○澤畑 壘・東原亮佑・河内秀憲・荻原弘和
 広報委員会 ◎岩野忠昭 ○乙子 智・三木 拓・本橋弘行

人文会 ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>
 (各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ)

「高校生のためのブックガイド」のご案内

人文会では会員各社の刊行物の中から、高校生に読んでもらいたい書籍を2点ずつ厳選し、「高校生のためのブックガイド」として1枚のリーフレットにまとめました。書店外商部様や書店店頭でのフェアなどで活用いただいております。



人文会Twitter開設のお知らせ

このたび人文会ではTwitterアカウントを開設しました。

アカウント @jinbunkai
<https://twitter.com/jinbunkai>

本会の活動やさまざまな情報を発信していきます。公式サイトよりもスピーディーに、また異なる視点からお伝えしていきたいと思っていますので、是非フォローや投稿のシェアをお願いします。



「生政治」と「われ」
「倫理」「法」「痛み」「権
利」「ヴィーガン」など
29のキーワードから、人
文学の最重要テーマ
である脱人間中心主
義の現在と未来を展
望する必読基本書。

定価 10780円
A5判 808頁
10%税込



アニマル・スタディーズ 29の基本概念

ローリー・グルーエン 編
大橋洋一 監訳

平凡社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
<https://www.heibonsha.co.jp/>

あなたの知らない「ケネディ」

JFK 上

「アメリカの世紀」の新星 1917-1956

フレドリック・ロゲヴァル 著
高月園子 訳



ピューリッツァー賞受賞の歴史家が、ジョン・F・ケネディの出自から上院議員になるまでの39年を濃密に描いた評伝の決定版(前篇)。【新刊】●上6600円・下6930円

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 ●価格税込

『人文会ニュース』バックナンバー公開のお知らせ

1973年6月に第1号を発行した『人文会ニュース』も既に100号を超えて久しく、読者の方からは過去の記事を読みたいという希望が寄せられることも多くなりました。

また会員社の移り変わりもあり、人文会として保存しておく必要性も高まり、本会創立50周年の事業としてバックナンバーのデジタル化に取り組みました。このたび一般に向けて公開することになりましたので、是非ご利用いただければ幸いです。人文会ウェブサイト、または下記のURLから閲覧ください。

URL <http://jinbunkai.com/contents/backnumber/>



法政大学出版局

<https://www.h-up.com/>

あなたがたに話す 私はモンスター

精神分析アカデミーへの報告

ポール・B. プレシアド 著／藤本一勇 訳
3500人の精神分析家の聴衆に激震をもたらした講演の全文。性的マイノリティを病者・異常者として扱ってきた旧来の知への根底的な批判の書。 1650円

《叢書・ユニベルシタス 1149》

カウンター セックス宣言

ポール・B. プレシアド 著／藤本一勇 訳
ジェンダー、フェミニズム、性と欲望の思考においていま最も過激な哲学者による対抗と解放の書。性を脱構築するクィア理論の最先端。 3080円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03 (5214) 5540／表示価格は税込です

この1冊で『道徳情操論』がわかる！

アダム・スミスを読む、 人間を学ぶ

滝川好夫 著

四六判美装280頁 2860円

『経済学之父』は、喜びや怒り、憎しみをどう捉えたのか。名著から学ぶ、楽しく生きるための知恵。

市場と共同性の政治経済思想
小島秀信 著
A5判上製400頁 4950円

自由な市場社会を支える共同性や非合理性の意味とは。

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込／宅配可

招かれた天敵

生物多様性が生んだ夢と罠

千葉聡 著
有害生物vsその天敵となる外来生物、自然vs科学の攻防の歴史。人と自然の関係の本質を凝視する秀作。 3500円

免疫から哲学としての科学へ

矢倉英隆 著
実証科学と人文学を縦横に行き来しつつ、より深くより包括的な知のあり方を探るスリリングな試み。 2800円

アディクシヨンと金融資本主義の精神

鈴木直 著
中毒化した認知機能が短期報酬を原動力に無限に暴走し、資本主義のカジノ化が進む危機のメカニズム。 3500円

終盤戦 79歳の日記

サートン 著
病気がちでも「宝の山のような」友人達に元氣をもらい、希望を手放さない詩人の一年。 幾島幸子訳 3500円

みすず書房 (税込)

東京都本郷2-20-7 www.msuz.co.jp

古代ゲノムから見た サピエンス史

発売即重版
太田博樹 著
「古代DNA」で明らかにするヒトの歴史。22年ノーベル賞(生理学・医学賞)受賞テーマがわかる！ 19800円

児童福祉の戦後史

孤児院から
児童養護施設へ

本庄 豊著
子どもたちはどのような生活教育環境におかれたのか。近江学園、東光学園などの未公開史料を元に描く。 38500円

戦前期日本のポスター

田島奈都子 著
広告宣伝と美術の間で揺れた50年。女性を主題の商業用から戦時期のプロパガンダ用まで、多様な展開を見せたポスター50年の軌跡！「シリーズ近代美術のゆくえ」 49500円

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2
☎ 03-3813-9151 税込

慶應義塾大学出版会

<https://www.keio-up.co.jp/>

神経症的な美しさ

アウトサイダーがみた日本

モリス・バーマン著／込山宏太訳 近代の
日米の葛藤が日本人の精神にどう影響を
与えてきたかを考察し、拡張型資本主義
を越える〈ポスト成長経済〉としての日
本の可能性を問う。 ◎4,180円

杉浦康平と写植の時代

光学技術と日本語のデザイン

阿部卓也著 写植という新たな技術とい
かに向きあい、日本語のデザインといか
に格闘したのか。杉浦康平が日本語のレ
イアウトやブックデザインに与えた決定
的な影響を明らかにする。 ◎4,400円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

沖縄 戦火の放送局 軍隊に飲み込まれたラジオ

太平洋戦争開戦とともに始まった沖縄の放送局。その最後の放
送局長の手記が発掘された。情報戦を担っていた日本軍と体
化していくメディアの実相にせまる。

21世紀のアメリカ資本主義 グローバル蓄積構造の変容

【編】河音琢朗、豊福裕二、
野口義直、平野健
【著】渡辺孝
【定価】2,200円(税込) 【定価】3,300円(税込)

大月書店

〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-16

TEL 03-3813-4651 HP otsukishoten.co.jp

セックスする権利

アミア・スリニヴァサン著 山田文訳 税込2970円
フェミニストがセックスについて考え語ってきたことを緒に、
21世紀フェミニズムを更新する

認識的不正義

権力を知るものの倫理にどのようなかわるのか
ミランダ・フリッカー著 佐藤邦政 監訳 飯塚理恵 訳
税込3740円

知識を伝達し経験を意味づける認識実践が、
められる不正義を理論的に析出 偏見によって歪

絵本のなかの動物はなぜ一列に歩いているのか

空間の絵本学
名作絵本・佐々木美砂
空閑智司・佐々木美砂 税込3080円
考察する 名作絵本を参照し、「空間構成のプロセス」という観点から

けい そう 勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<https://www.keisoshibo.co.jp>

徳仁親王

テムズとともに

英国の二年間

天皇陛下、
青春時代の清新な
英国留学記
新装復刊

1983年から約2年間を過ごされたオックスフォード大学での日常生活や研究生活、音楽活動、ご学友との交流、登山やテニスなどのスポーツ、英国内外への旅……内側から英国を眺め、外にあって日本を見つめ直した「何ものにも代えがたい貴重な経験」。

▼定価 1,100円 10%税込

紀伊國屋書店

出版部:東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519

心理・教育・人事のための テスト学入門

繁例算男 編 テストに携わる人が理解を深めたい
テスト学の基礎から最新理論まで解説し、人事と
臨床における活用場面まで幅広く紹介。2970円

ウェブ調査の基礎

実例で考える設計と管理

山田一成 編著 公募型ウェブ調査の有効
利用のために調査の方法論的基礎を徹底
検証。日本の実例を多数紹介・解説した
データサイエンス時代の新標準。3520円

脳の働きに障害を 持つ人の理解と支援

高次脳機能障害の実際と
心理学の役割

日本心理学会 監修 松井三枝・緑川晶 編 脳の
損傷に起因する高次脳機能障害をどのように理
解し、当事者をどのように支援していくのかを、
臨床神経心理学の立場から考える。2860円



誠信書房
SEISHIN SHOBUN

Tel 03-3946-5666

東京都文京区大塚 3-20-6

《私》の哲学 をアップデートする

永井均／入不二基義／青山拓央／谷口一平
『《私》の哲学』を哲学する』から十年以上経ち、ほぼ同じ面々が
眠っていた議論を復活！ ワークショップの記録と、そのアフ
ターノートが《私》の哲学をめぐる議論をアップデートする。



2860円

永井均／入不二基義／上野修／青山拓央
《私》の哲学 を哲学する 《新版》
入不二提案と呼ばれる永井哲学にとって最重要な指摘が行われ
た書が待望の復刊！ 永井哲学の内包、時間、現実、ロゴス、
他者意識などのトピックをめぐる哲学的四重奏。2970円

春秋社

東京都千代田区外神田2-18-6 (税込)
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

フッサール志向性の哲学 富山豊
哲学者たちの思想を補助線に「生」と「知」の交差するフッサ
ールの画期的な概念を丁寧に紐解く、唯一無二の入門書 2460円
魔術の歴史 クリス・ゴステン
氷河期から現在まで
すべてのものとともに生きるという「魔術」が持つあたらしい可能
性を切りひらく、壮大にして革新的な魔術論 4620円
メトロポリス興亡史 ベン・ウイルソン
ウルク、バビロンからローマ、バグダード、ニューヨーク、東京そしてフランスまで
人類は都市にどのような夢を見たのか。そして、その行きつく先
はどこなのか。都市をめぐる壮大な人類史。 5280円

青土社

東京神田神保町 ☎03-3294-7829
http://www.seidosha.co.jp/ (価格税込)

住職さんは 聞き上手

羽生善治
為末 大
いとうせいこう
熊谷晋一郎
国谷裕子
黒川伊保子
山極壽一
佐藤 優
久坂部 羊
仲野 徹
山口 晃
坪田信貴
高 史明
小川洋子
石川善樹
平田オリザ

釈徹宗の

だから世間は面白い

釈徹宗

どんな相手からもよいお話を引き出せる
座談の名人・釈徹宗先生がホストとなっ
た好評連載、待望の書籍化。1870円

晶文社

〒101-0051 千代田区神田神保町1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

2023年4月25日発行 年3回発行 第143号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みずす書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉